
楽譜のない歌たち

田中 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽譜のない歌たち

【Zコード】

Z9711E

【作者名】

田中 遼

【あらすじ】

詩集です。シリアスな感じです。 いつの間にやら長くなつてしましましたが、連續性は皆無なので気楽に読んでやってください。

もてあました数々の詩

腐らせるのももったいない気がして

それでいて公にあることためらひを感じ

その理由を探つてみると

“李徵”という詩人のように

自分を否定されるのが怖かつたりして

情けないとも思つても

一步を踏み出せざるに

溜まつていいく言葉の山

自分で書いた言葉もあり

自分で描いた言葉があり

自分が思つた言葉がある

時が来た

封印は秘密を

永遠に封じるためにあるわけじゃない

開かれる時を

開く人を

選ぶために

だから・・・・・

時は来たのだ

時（後書き）

作った作品を放つて置くのもどうかと思ふ、詩集を作りました。
切ない恋愛を描いた詩、反戦の詩、変化のない日常を嘆いた詩。
バラエティに富んだものを、提供できればと想つております。
どーかお付き合ってください。

誰でもいい 誰でもいいから 助けて下さい

誰にも届かない場所の記憶 誰より自由だった頃 僕は空にいた

だけど今 僕は地上にしづくまつてゐる

都会の真ん中 四角い空の下

立ちすくむ僕 泣くことすら出来ず 狹い空を見ていた

傷つき血を流す僕は 誰が見ても負け犬

かつて空に羽ばたいた翼は折られてしまった

地面がこんなに冷たいなんてあの青空がこんなに遠いなんて 知
らなかつた

この翼 傷つけたのは俺の弱さか

それとも世界の闇か はたまたその両方が

めまいにかられ

もつては飛べない

ずっと昔 僕は助けなど いらなかつたのに

誰よりも疾く走つた記憶 負けたことがなかつた頃

僕は王だつた

だけど今 僕はこんなとこに倒れてる

行く場所もなくて 帰ることも出来ず 俯いた僕

痛みだけがここに 胸に残つちまつた

痛みにつづくまる僕は 誰が見ても負け犬

かつて地の果てまで駆けた脚はぐじけちまつた

世界がこんなに冷たいなんて 走れないのがこんなに辛いなんて
知らなかつた

この脚をぐじかせたのは俺の弱さか

それとも世界の闇か はたまたその両方か

どちらにせよ

逃げ道は断たれた

なくしたのは 自由 手に入れた 数多の敗北

折れた翼を動かしながら くじけた脚を引きずつて 僕は進んでる

この先に 何があるのかすら分からずに

希望は見えない 先には闇ばかり 立ちすくむ僕

今までの全てが 無意味にみえちまつた

絶望におびえる僕は 誰が見ても負け犬

かつて過ごした栄光の日々はただの幻

翼は折られ脚はぐじかれた 傷だらけ 満身創痍で掴んだ 答えが
それ・・・・・

せめて それを変えるため 折れた翼で羽ばたくよ くじけた脚で
歩き出すよ

折れた翼を動かしながら

くじけた脚を引きずつて 僕は進んでる

一歩ずつ 一歩ずつ・・・・・

見上げた空は

雲ひとつない

青い空・・・・・

片想いの君へ

外の雷

突然の夕立

ぼんやりと下を眺めながら

君は大丈夫かな なんて思つたりして

確か雷が苦手だつたよな まあもう関係ないか

急に思い出した 君の顔

大概笑つた顔しか見たことないけど

こんな日は泣いてるのかな？ 雷に怯えてんのかな？

こんなこと いいたかないけど

たまに君の夢を見るんだ

君と話して 笑ってる夢

ホント笑っちゃうけど

僕の望みなんてそんなもん

好きな人と笑い合えるってのが

ただただ嬉しいんだ

君の目に映った僕

どんなんだつたんだろう？

道を歩いてる人の傘は 互いにぶつからないよつな

見事なまでのシステムで 動いてる

雨も雷も 止む気配がない

どつかに落ちたのかな？ すげえ音がしたけど……

外の雷

突然の暗闇

まだ日が暮れたわけじゃないのに

君は大丈夫かな なんて思つたりして

君も嫌いだろ？ こんな天気は

まあもう関係ないな

急に思い出した あの笑顔

他の奴に見せたのと大して変わらない

少し悲しくて切ない

だけど一番みたい笑顔

こんなこと 言いたかないけど

たまに君を思い出すんだ

君と話して 笑ってた頃

ホント笑っちゃうけど 僕はそれがずっと続くもん

終わらない夢だと思つてたんだ

だけどそうじやなかつた

君の目に映つた僕 どんなんだつたんだる?

きっとどうでもいい連中の 一人に過ぎなかつたはずだ

むしろ嫌われていたかも

今走った稻妻みたく もう見たくもない

そんな存在かもな すげえカッコ悪いよ……

外の雷

突然の青空

まだ嵐は終わってないのに

急に雲が開けて 青空が広がった

君も見てるかな? この青空を

ものすいじくキレイだぜ?

急に思い出した あの夕日

たまたま一緒に見た あのキレイな夕焼け

今の空もキレイだけど やっぱあれが一番なんて……

こんなこと 言いたかないけど

わざわざの言葉は取り消すよ

君と話して 笑ってた頃

ホント笑つちやうけど 僕はその頃のことをずっと

君のことをずっと想つてるんだ 驚くだらうけどね

君の顔に映つた僕 どんなんだつたんだ?

知りたくもあり知りたくもなし

聞く勇気があればよかつた

0%じゃないはず 奇跡があつたかもしれない

今の稻妻は 背筋が凍るほどに

すげえキレイだつたな……

外の雷

突然の夕焼け

西の空が晴れ渡ってきた

まるで計ったように

太陽が目の前に

君も見てるかな？ この夕焼けは 現実なのか？なんて……

急に思い出した あの言葉

あんまりキレイ過ぎて 天国を見た気分

そう言って君は笑った

僕も同じ気持ちだった……

こんなこと 言いたかないのは

恥ずかしいのかもしれないな

君が知ってる 僕のカタチは

ホント笑っちゃうけど 仮面と鎧をつけた姿

自分の姿すら思い出せない 惨めな男なんだ

君の目に映った僕 どんなんだったんだろう?

マイナス思考に取り付かれて 自分が見えなくなっていた

例え今日の空みたく 夕焼けが僕を血の色に 染めたとしても

晴れ間は期待出来ない すげえ夕日だけどな……

君の目に映った空 どんなんだったんだろう?

地を這つよづな音の雷

天地を貫く稻妻や

燃えるような西の空

地平線の赤い太陽

幻みたく 目の前に広がってる

僕が独りで見上げた空

どこかで君が見てることを

一緒に感動してくれることを

この空が繋がつることを

ただ
祈つ
て
る

毎朝のこと もう馴れちまつた

人ごみに揉まれ 流され 潰される

周り全てが敵になってる

おかしいな ずっと昔はこんななんじゃなかつたはずだ

少なくとも 隣に一人 味方がいた

周り全てが味方に思えたこともあつた

人を救えるのは 人だけという 言葉があるけど

もしそうなら

人を歪めるのも 人だけなんだろうな

毎朝のラッシュショアワーが 映す世界

人を押しのけ カきわけ進む この世界は

歪んじやしないかい？

毎日のこと だけビビりしても 分からない

何を手指して 生きるのか

何を 秘めて戦うのが

おかしいな ここまで歩いてきたはず 何に向かっていたのだろう
？

ただ進むこと それだけだった

前後の区別なんかは 存在しなかつたんだ

人は自分が今 何処にいるかさえ 知らず生きてる

知らないまま 過ごす方が いいのかな？ 幸せなのかな？

どちらにせよ 出来ることは 前に進む

それだけなんだ

目を開じてみて 深呼吸だ そこからがスタート！

さあ 目を開けろ！ 今見えたものが君の“前”

向かうのが何処だろうと “先” であることは 間違いないから

迷わず進めばいい

その道を 突き進むんだ

毎日のこと もう馴れちまつた

また今日も 一つ以上の 大切な命が明日を見失つた

おかしいな ずっと昔はこんななんじゃなかつたはずだ

少なくとも 何かがどつと 込み上げてきた

抑えられない 怒りが

人事じゃなかつたのに

人が人のことを 傷つけることが ただそれだけでも 罪なんだと

人は気づいている

皆知っているのに

毎朝聞くこえるニュースが 伝えるのは

今日の嘆きと その先の闇

この世界に 希望はあるのかな?

毎日のこと そろそろ馴れても いいころだ

だけど いまだに 絶望に怯え 希望を捨て切れない

おかしいな ずっと昔はこんななんじやなかつたはずだ

少なくとも 傾かないで ただ前を見て

明日じゃなくて 今日の 今この時を生きてた

人と人が出逢う それだけで奇跡 僕達はそれに気付けないで

それ以上を 期待して 明日を待つている

今この時を生きるひとすら出来ない 僕らの日々に

あるべき 希望はあるのかな?

ああ始めるつ! 今希望が見えないからと 田を伏せてじりする
だ!

変える時はきた

希望がないなら その手で作ればいい

君の手は いつも出来るから

そのため いつもあるから……

モザイク

昔々

僕の思い描いた未来図は

田の前にある絵のよのこ はつきりと見えていた

誰よりも成功した あの偉人よりも

伝説となつた あの戦士よりも

高く昇つてやると 意気込んでいた

僕は自信に溢れてた

ところが心が大人に近づくと 夢を諦める手段を覚えた

“無理だ”とか“真面目に考えろ”とか言つ 周りの雑音が気になつてしまつた

しまいには自分が自分を信じなくなっていた

“俺には無理”が口癖になってしまっていた

夢を見ろといふへせに

僕らの夢を否定する奴らに 迷わされていたんだ

僕は僕の人生を歩くのが 僕であることを 忘れて生きていた

モザイクのかかった未来図は よく見えないけど これだけは分か
る そこに立っているのは

僕だ

昔々

僕の思い描いた未来図に

誰かが入り込むことは けつしてないことだった

誰かを誰より信じるということだが

誰かを誰より愛するということだが

不思議でじょうがなくて 一生縁のない物だと思っていた

ところが心が大人に近づくと

段々とその意味が分かりかけて そしてまた分からなくなってしまつた

縁のない物ではなくなつたけれども

不思議はいつまでも不思議なんだと

今 気付いた

理解出来ない だけビ どこかで知つていること

僕は君を愛してる ただそれが言えたなら

きっと何か変えられたはずなのに

僕は僕自身の気持ちに 気づくことが出来ず ただ首を傾げてた

モザイクのかかった未来図は よく見えないけど これだけは分かる 僕はけつして独りじゃない

モザイクのかかった未来図に 映っているのが

成功を手にした僕とは

君と一緒にいる僕とは

限らないけど

そこ立っているのは

そこ立っているのは

僕だ

今は昔

今は昔

夜には闇が 支配した

人は光を 温もりを いつでも求める

月は冷たく 星じゃ足りない そう言って

人は火に しがみつく

それでも

忘れちやいけない

事がある

炎がくれる 祝福と 呪いとを

燃える炎が 奪う命を 壊す物を

その力を

光が闇を濃くし

火が温もりを焼き消すことを

手に入れた分だけ 何かが消える そのことを

忘れないで

今は昔

夜には闇が 支配した

人は光を 温もりを いつでも欲しがる

闇に怯えて 明かりがいると そう言って

人は灯を手に入れた

それでも

忘れちゃいけない

事がある

明かりが点り 消えるものがあることを

数多の星が 光を失い 星座達は 力尽きた

忘れないで

科学が神秘を消し

“進歩”が闇を濃くすることを

そのことを

地上の広告が

街灯が

電球が

宇宙の神秘を 隠してしまつ

レグルスの囁きを

シリウスの歌を

ヘラの祈りを

忘れないで

退屈な日々に

なんでだよ どうしてだよ

なんで俺が生きてんだよ どうしてまだ生きてんだよ

死にたくない 毎日

とりあえず 退屈

トーマス・エジソンは発明家になるために 生まれてきた

マイケル・ジョーダンはバスケットをやるために 生まれてきた

エジソンの発明は人々の生活を変えた

ジョーダンのプレイは人々の夢を支えた

俺は？ 俺には何が出来る？

多分 俺は悪役のいない ヒーロー物の主人公

誰も必要としない 力が余った 厄介者

何になるため 何のために 生まれてきたのだろう

恐らく

俺は生まれる場所と時間を 間違えたんだ

「……じゃないどこか 今じゃないいつか

俺の意味が転がっている

なんでだよ ビリしてだよ

なんでもまだ死んでないんだ？ どうしてまだ生きてんだよ

変化がない 毎日

とりあえず 退屈

アレキサンダーでも 死ぬときは その最期は 独りだった

坂本龍馬でも 自らの 最期は予期 出来なかつた

大王の遠征は人々の世界を広げた

龍馬の力がこの国の未来を作つた

だけど あいつらは死んじまつた

夢の 途中だつたはずなのに 英雄は逝つてしまつた

誰も逃げられないんだ 何を持つても 皆が死んだ

何になるため 何のために 死んでいったのだろう

恐らく 僕は倒れる場所も時間も 選べはしない

ここかもしれない 今かもしれない

俺は何一つ遺せない

なんでだよ どうしてだよ

なんで俺は生きてんだよ ビ�してまだ死なねえんだ

探している 解答

見つかってねえ 気がした

スーパーヒーローは 絶対負けちゃいけない それが掟

あの英雄達は 勝つたけど 負けてないわけじゃない

なあそりだろ？

ヒーローは当然のよつて世界を救えるけど

英雄達は道半ばにして倒れていく

あつと これからもずっとそりだ

俺は 道を選ぶことやえも ままならなりゅうて死んでしまつ

誰も逃げられないから 何しても無駄と 謹めてる

何になるため 何のために 生きてそして死ぬのか……

俺達 生まれたり死ぬ場所も時間も 選べはしない

ここがベストとか 今しかないとか

俺は何一つ選べない

選択肢があるとしたら

自分で死ぬか他の何かで死ぬか

意味に悩むか

無い物ねだりをやめるか

ただ それだけのこと

俺自身 進んでるはずだったのに

俺の歩みは 回し車を 回してただけだった

前がどこかも 知らないままに 坂を転がる

進む先が前だなんて 信じる気はないけど

方向を変えられないなら

そう思つた方が幸せかもしれない

なんでだよ ビハッてだよ

なんで俺は生きとんだよ ビハッてまだ生きとんだよ

まだ未来はあるナビ

とつあべ

退屈

今も生きてこらナビ

とつあべ

ちょっと面白いな眼

騒がしい教室の中 笑い声と一緒に ちょっとした怒鳴り声 平日の学校の休み時間

誰かが飛ばした 輪ゴム鉄砲

人に当たって 床に落ちる

それと同じ気軽さで 銃の引き金が引かれ 命が吹き飛ぶ

そう 同じ星の上で 今日もまた 人々が争ってる

尊い命が 明日を奪われた

騒がしいテレビ番組 笑い声と一緒に ちょっと[冗談じみた]話題で視聴率稼いでる

どつでもよ過ぎある スキャンダルとか

レベルの低い バラエティーとか

それと同じ気軽さで 死者の数を口にして “知った顔”をする

そう 同じ星の上で 今日もまた “仲間”が死んで行くのに

俺達はずっと 田を逸らしている

騒がしい道の真ん中 笑い声と一緒に

ちよつと真面目な歌を 名前も知らない誰かが歌つてる

誰かが飛ばした 汚いヤジ

的を外れた ただの喚き

それと同じ気軽さで 彼を眺める俺達 まるで他人事

そう 同じ星の上で 今日もまた 誰かが叫んでものに

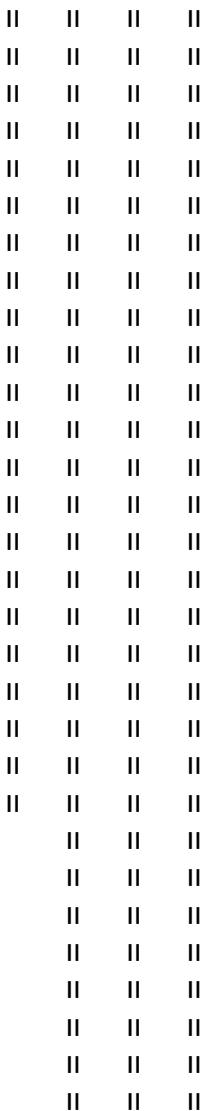
俺達はいつも 素通りしていく

大切なことを 聞くこともせず 見ることもせず

知らない振りを演じ続ける

今日もまた 誰かが何か伝えようと

歌い続ける



といあえず、じゅり、変化なし

分かってるよ これで最後だ だけど笑って手を振るよ

また会おう バイバイ

未練はないよ ただたまに 会いたくなる もうとやうなる

ほんの少しの 期待を混ぜて 人波を 見回すために 背伸びをしてる

そのせいかもな ほんの少し 背が伸びたよ

変わったのは その位

痩せてはないし 太りもしてない

髪の毛だって 黒いまま 手をポケットに 突っ込む癖も 治つて
ないし

何より 想いが あの日のまま

未練はないよ ただたまに 会いたくなる 今でもそりだ
ほんの少しの 期待を混ぜて 人波に 君を探して 歩いてくるよ

そのせいかもな ほんの少し 挙動不審（笑）

変わったのは その位

考え方は そう変わらないし 値値観だって 変化無し

性格なんて 成長ゼロで 笑える位

何より 想いが あの日のまま

ほんの少しの 期待を混ぜて 人波で 声を待ってる 君が呼ぶ声
を

そのせいかもな ほんの少し 耳が冴える

変わったのは その位

可能性が あるとこ限定 片耳だけに イヤホンで

音は控えめ 笑える位 準備万端

いつでも 君を 待ってるから

いつでも
君を
待つ
てるから

何より想いがあの日のまま

The End Of A Day

今日もまた 今日が 終つちました

夢はあるのに やこに向かつて歩き出せずに

こんなところに 足止め食つてる

言い訳ばつか 上手くなつてくれんだ

全部人のせいにして

全部自分のもんにして

結局全部 失つた

夢を求めて 明日に手を伸ばしてみるけど 幻は掴めない

手を伸ばすより 足を動かすんだ

なんて言つてはみるけど

出来ないから ここにいるんだ

今日もまた 今日が 終つちまた

夢があるのに セレニティに向かつて 走り出せ

道の途中で 迷子になつてゐる

逃げ道だけは 知つてゐるんだけど

全部忘れたふりをして

全部知つた顔を作つて

結局全部 失つた

夢に迷つて 明日に心をさせても

幻は摑めない

未来図なんて 当てに出来ないんだ

なんて言つてはみるけど

それくらい 分かるんだ

今日もまた 今日が 終つちまた

夢の在りかは 皆知つてゐる

知つてゐるけど

ただそこまでの 道が分からぬ

知つてゐる振りで たどり着いた今

全部から逃げたくて

全部捨てられるとほざいて

ホントに全部 失つた

夢のためだと 明日も見失つた今

幻さえも映らない

この中に 何を掴めるかな

なんて聞いてはみるナビ

掴みたいと 思つた記憶さえ

今日もまた 今日が 終りちまた

・ 10年10月20日 本文を修正しました。

“唯一の真実は 祈つても無駄つてことや” 彼はそうひづつひ

“神様なんて 信じない”

彼は今 夢を捨て “まともな”道を選んだ男

でも 思い出してみると ずつとずつと 昔

ただただ 信じてた “神様はいる” そう信じてた

あの頃は この空も あの海も 今よりずっと 綺麗なものに 見
えていた

そつそれだけで 十分だった

そつそれだけで　夢も希望も　神様も　信じられた

“あの頃はまだガキで　夢だって　信じてたから”　彼は笑った

“馬鹿だったのさ　俺達は”

彼は今　23　時間は7時前といつとこ

でも　あれを見てみろよ　ずっと向こうの　東に広がる　あの空に

誰かが描いた　絵が浮かんでる

あの頃は　朝焼けや　夕焼けに　心が動き　ふと気づいたら　泣いていた

それだけで 素直になれた

そうそれだけで 過去も未来も 神様も 信じられた

“ 神様がいるんなら なんでまだ 何も起きない？” 彼のつぶやき

“ 平和が来たり しないのか？”

彼は今 昨日見た ニュースを思い浮かべたとこ

でも 考えてみろよ ずっと昔の 誰かの台詞

“ だからって 神以外には 不可能だ” って

あの頃は 夢を見て 暮らしてた “世界を変える 変えてみせる
” と 思つてた

“それくらい 簡単だ”とも

そつそこのくらい 自分を信じ 人間を信じていた

“信じちゃダメなのかな？” 僕の質問

“夢はいつかは 叶うって”

僕は今 何よりも 夢追い人に なりたい男

でも やっぱ不安は つきないもので 悩んでしまう

“俺の道は これでいいのか？ ビコヒツく？” って

に だけど今 目の前に ある道に 光が見えた 導かれてるかのよう

それだけで　迷いは消える

そうそれだけで　明日も夢も　神様も　信じて行ける

そして今　目をつむり　問い合わせる

世界はどうに向かうのでしょうか？

そして俺は　その中で　何が出来ますか？

その問い合わせを　皆が考え始めた時に　銃声が止む

そして答えを　全ての人　が　見つけたら　世界は変わる

変えられる

そう信じてる

少しだけ、一緒に、歩いてほしい

君が目の前に現れた時

僕は何を言えるんだろう

何が言いたいんだろう

分からぬいけど はつきつてしまふことがある

びしみもなく 君に逢いたい

卑怯だとは分かつてゐる でも

また会つた時 田を伏せてすれ違つ位なら

友達のまま 一緒に居たい

そんな弱さが 二人の距離を 広げてしまつ

もしも 月と地球の引力が もう少し弱かつたなら

一つの距離は 途方もなく 広がっていた

何億年か 光のように走れたら 君の背中が見えるかも

そんな思いを 膨らませ

今日も秒速10メートルの 電車の中

光の速さで走れたら……

微妙なこと何だけど でも

また会えること それだけは信じてる

もう一度あの頃のまま 笑いあいたい

そんな願いが 不確かな“僕”を 繋ぎ止める

もしも 月の光が 強力で 星を消すようだつたなら

歌なんか 生まれなかつた 作れなかつた

何億年も前に宇宙で歌われた 星達の歌

今まさに その歌声が

僕の心を強く震わせ 何とか今に 保たせてい
る

何億年か 光と共に走れれば

君の背中が見えるかも そんな風には思つけど

今日は秒速1メートルで ゆっくり歩く

星達の歌が聞こえる

君が目の前に現れた時 僕は何が言えるだろう

この胸の内を全部吐き出せるなんて 思わないけど

伝えたいことが、あるんだ

天気雨

晴れた空から 雨がぽつりとくるような突然さ

急にあの娘が まぶたの裏に 現れた

あの頃と もんじょうな とてもかわいい 笑顔が見れた

そういうえば クラスマートで 良い友達で それ以上では なかつたはずだ

それなのに なんだか この気持ち 脳のざわめき 高鳴る鼓動

ただふつと 思い出しただけなのに あの頃は “ただの” 友達だつたのに

急に降り出す 天気雨

晴れた空から 雨が降つてくるよりも 摩訶不思議

急にあの子が どうしてるのか 気になつて 気になつて

この心から 胸の奥から 何かが溢れる

ここまで 我はいつでも 言いたいことも 言わない今まで 溜め込んできた

それなのに この思い 心の喫き 壊れた堤防

ただちょっと 流れ出しただけなのに いつの間にか 飲み込まれ
溺れてる

急な嵐は 誰のため?

荒れた空には 晴れ間なんか ある訳無い あるわけないのに

急に田の前に 見えはじめた 青い空

それが今 空一面の 雲を押しのけ 広がっていく 空一面に

そういうえば これは狐の嫁入りだけ? 雲が消えても 雨は止ま

ない

そう君が いなくても 君への想い 消せもしないから

ただもつと 楽なものだと思つてた “忘れる”といつ 選択肢

急に溢れる 胸の内

天氣雨なら すぐに上がると ずっと思つてた

でも今も 君への想い 降り続ける

急に降り出す 天氣雨

ずっと続く 天氣雨

あいだにうつ病

希望への航海

期待に胸膨らませ　帆に風を受け生まれ育った港から　大海原へ漕
ぎ出した

あれから時が経つた　百日を数えた辺りから　日にちが分からなく
なり

とうに着くはずの港は影さえ見えない　それどころか　今は陸地さ
え見失つた

昼には日差しと熱が　夜には闇と寒さが　僕を襲う
水はそこいら中にあるのに　飲めなくて　魚がいることは知つてゐるけ
ど　捕まえる術がない

でも　飢えより　渴きより　心を蝕む絶望が　僕を苦しめる

遙か昔に　思えるあの日　あの町を後にしたあの日

何か求めて　帆を張つたのに

どうしても　思い出せない　旅の理由が　行きたかった場所が　あ
の輝きが

偽の灯台　幻の陸　思わせぶりの雲　何もない無人島
真の絶望　冷たい恐怖　心にかかる闇　光が見えない空

それでも　絶望の海原を　今日も船が渡つていく

期待外れの 大嵐と 予想以上の荒波達に 摺さぶられ 沈みかけ
てる 僕の夢

あれから時が経つた 出港の日には見えてた空 蝕まれた心には
何も響いちゃ こねえんだ

星なんて もう見えない それどころか 今じゃ太陽さえ疑つてる
嵐には 動けぬ苦しさ しけには沈む恐怖が 僕を襲う

この大きな海の上では 僕なんて ホントに足りない存在
藻屑みたいなもんだ

そう事実が 真実が 心を蝕む 絶望に 倒されかけてる

遙か昔に 思えるあの日 あの街を後にしたあの日 何か光を 目
指してたのに

どうしても 思い出せない

星達の唄 風が奏でた曲 もう聞こえない

それでも 光を探し求め 今日も船を漕いで行こう

偽の灯台 幻の陸 思わせぶりな雲 何もない無人島

真の絶望　冷たい恐怖　心にかかる闇　光が見えない空

それでも　希望を抱きながら　今日も船を漕いで行こう

いつか見える大地を

いつか昇る太陽を

いつか掴む夢を

信じるんだ

薄汚れた世界で

祈れ！ 絶望の中で

叫べ！ 嘘きの中で

他に何が出来る
？

「ゴリラのよくな世界 救いのない日常

俺達はただ 抜け出すことだけ考えてる

同情してゐる余裕はない 俺自身 泥の中

自分のことすら 救えないのに 一体誰に 手を差し延べうと言つ
んだ？

世界中が泥まみれ

誰かが言つ

“ 明日なんて 今日と同じか より酷く変わるものだけのこと

期待は失望に 希望は絶望に 変わつてく

いつでも いつだって そうだった

それだけは これからも 変わらない

祈れ！ 絶望の中で

叫べ！ 嘘きの中で

他に何が出来る
?

どうにもならない世界 希望のない日常

俺達はただ 足搔いてるだけ

強情に 変わることを 否定して

愚かにも 自分一人だけ 救われることを 祈つてる

目を閉じ 耳を塞いで 悲鳴とは無関係の振り

目を覚ませ

明日のこと 今日は見えない それこそが 俺達の希望

期待と希望で ポケットを一杯にして 先へと 未来へと進もう

それだけは諦めちゃ いけない

だから顔を上げろ 僕達にもう俯く理由は 存在しない

滑稽な程 純粋に未来を信じて

進めばいいんだ

祈り続けて 願い続ける

救われることじやなく

歩きつづけることを

自分を信じるってことを

祈れ！！

2009年6月26日 ～MJに捧ぐ～

夏の始まりの朝

一つのニュースが駆け巡り

一つの時代が終わった

彼が歌った 彼が踊った

そんな彼が 死んだ

誰だつて 彼の名前は知つていて

一度位 彼の歌を聞いたのに

今日もまた 人の流れは 流れていく

かつて世界を制した男が 空に消えたと言つたのに

それすら毎日の噂話の一つに過ぎない

時代の終わりの朝には 少し口が動くだけ

何も変わらず 日々は過ぎていく

たくさんのスター達

誰もが最後は眠りにつく

そして僕自身も

彼は歌つた　彼は踊つた

そして彼も死んだ

誰でも　二百年後には死んでいて

名前なんて　忘れられてるはずなんだ

今日もまた　どこかで誰かが　覚めない眠りについていった

かつて世界を制した男でも　ただの影に変わってしまい

しまいには消えていくんだ

歴史のページに　名前を残せない僕らは　より早く消えていくだけ

何事もなく　日々が過ぎていく

夏の始まりの朝

一つのニュースが駆け巡り

一つの時代が終わった

彼が歌った　彼が踊った

そんな彼が死んだ

時代の終わりにも

何事もなく

人は流れていく

2009年6月26日～Mに捧ぐ（後書き）

サブタイトルで大体分かっていただけたとは思いますが、これはマイケル・ジャクソン死去のニュースを聞いて作った詩です。

授業を片耳で聞きながら、ノートに書き殴りました。すぐ出来上がり、さあ帰つて公開するぞー！と意気込んでいたのですが、この日に限つてノートを学校においてくるという大失態（・・・・・）

今日よつやく公開できたのですが・・・・・・

タイムリーな詩なんて作ったことなかつたから、多少落ち込みました笑

まあ、人生そんなもんですよね？

では、次の更新まで

（^_^）／＼よな／＼

P・S・

題名を少しいじつました。いつのまつがじつくり来る気がします。

‘10・1・29

力チマケ カミキレ

賢く生きようと頑張る方々

学歴

収入

外見

そんなことを追い掛け 気がつけば

人生は勝ち負けに変わつてた

“勝ち組”の奴が言う

“金で買えないものはない”

“負け組”の俺が言う

“金より大事なものがある”

何故だか知らないけど ヒトはみな

ただの紙切れを信じてる

賢く溜め込んでいる方々

金が全ての勝ち組たち

そんなことを目指し 気がつけば

人生を誰かに吸い取られていた

あちこちで声がする

“ どこので間違えたのだろう ”

開け放した窓の向こう

“ そんなことより、何が何だ？ ”

なんだかわからないけど ヒトはみな

回じとりひきを回つてゐ

おもちゃを欲しがつても

手に入れた瞬間に 飽きてしまつて

新しい何かに手を伸ばす

そんなループを ヒトは続ける

勝ち組が言った

“欲しいものはなんでも手に入る”

負け組は尋ねる

“それじゃ貴方は幸せなんだな”

答えはなかった

何故だか知らないけど ヒトはみな

ただの紙切れを愛して 信じて 手に入れたがる

その代償が何であつても……

虹（前書き）

“虹”は、先日東京の空に広がった二重の虹を見て、書いたものです。“見た！”といふ方、いらっしゃいませんか？

ホントに凄かつたですよー。

あまりに綺麗だったので、いひつて詩を書き、こんな蛇足な前書きまで書いてしまった次第です。

ではでは、楽しんでいってトトセコまわ。

田中 遼

天氣予報の女子アナが 梅雨が明けたと 嬉しそうに言つたのは

確か一昨日

といひが空は 一向に晴れてくれない

君の右手を ときしきめてた 僕の左手

温もりだけが まだ残つてゐ

それを消すため 忘れるための

夏を待つてゐ

手を伸ばしても届かない　君の背中に　一体何を言へば良い

確かに君と手を繋いで　春を過いしたはずなのに

梅雨は終わって　雨は上がりて　空は開ける　はずだったのに

続く春雨　やよなりの雨　夏の村雨

そして　光が　雨上がりの空を抜け抜ける

世界で一番　美しい橋　七色の輝き　それが今　空に輝く

君はあの一重の虹を 見てますか？

君の街でも この奇跡は起きますか？

雨は止んでも 梅雨が明けても

君はもう 戻らない 奇跡は起こらない

だから虹の向いの 夏を待ってる

きっと何かが 僕を待ってる

今夏が 始まりを告げ

結局、「奇跡を……」との「虹」は分かれてしまった。
まあ、前々からやううとは思っていたのですが、いろいろとあって
(正直、面倒だっただけですが笑)、今日になりました。
まあ、いひのまつが見やすくて良こですよね?

では。

田中 遼

光のカケラ

埃だらけの夢

輝きをなくした希望

部屋の片隅 育つ暗闇

それでも僕は 目を逸らす

あるものを磨きもせぬ 輝くときを待っていた

消えた光を 探してた

部屋の隅 目を逸らした闇

僕の心が 失った意味

埃まみれの My Dream

輝いていた あの頃

この手につけぱいの夢達が 今にも空に飛び出さうと

この手の中で暴れていた

一体何が起きたんだろう

順番に 一つずつ 息絶えていく

夜の街 窓の明かりが消えゆくまつに 一つずつ

今 夢が指の間をすり抜ける

ただ一つ 残つたものも 冷たくなった

薄汚れて ボロボロの 僕の夢

手にとった 瞬間に“それ”の鼓動が 韶き始める

飛びたい！ 飛びたい！

僕の場所はここじゃない！

空の向こうへ 僕は行ける……

その声は僕の声 心の想い

いくつもの 希望を 夢を 殺してきた ぶち壊してきた

いつだって そういつだって

希望が死んだ時

夢が途絶えた時

僕自身の手が

僕自身の心を

バラバラにしてきたんだ

今抱えてる 震えるカケラ

もう閉じ込めは

封じ込めはしない

例え途中で 息絶えるとも

この空を

この広い大空を

羽ばたかすんだ

そう決めた時

窓の外

空の向こうに

新たな星が

一つ 灯つた

貴女に捧ぐ

貴女は僕に 微笑んだ 貴女の声が昔のままで 余計悲しくなった
んだ

痩せたのを 病院食のせににして 笑つてたけど

貴女は昔から 嘘をつくるのが とても上手だった

お願ひだ 強がらないで

このままじや泣いてしまつよ

声がかされた

貴女はとても 辛そうだった “貴方にだけは 見せたくなかつた
” つて

お願ひだ いかないで 僕の願いはそれだけなんだ
どんなことでもしてあげる

だからお願ひ いかないで

貴女のママが言つてたよ

貴女は僕を待つてただけで　会えた後すぐ　貴女が空を駆け登るつて　分かつてたつて

貴女はあの瞬間じまん　生きていること自体が　奇跡きせきだったらしいね

ごめんよ　でも貴女との　約束は　果たせない

ほら見てよ　涙がとめどなく　流れてくれる

止められる訳がないんだ

今でも　貴女がそばにいるような　気がする

どこかで生きているような気がするんだ

だけど貴女はいつてしまつた

涙の痕を 風が撫で 倦く僕に 光がさした

風の中 僕の中 光の中に 貴女が見えた

ありがとう 貴女がくれた 全てのことにお礼を言つよ

ありがとう そして さよなら……

半分フィクションですが、半分はノンフィクションです。どのあたりが本当で、どのあたりが創作なのかはあえて書きません。

世の中、知りなくていいこともあると思います。

日が昇り そして沈んでいく

そして一日は 僕たちを擦り減らして 運びで行く

良ことなんか起こらないし

悪いことだけ積み重なって 遥か高くて そびえ立つてゐる

あ～あ 全部後ろに置いていけたらなあ

まあこいや 明日は来るた

日は昇り 昨日を置いていく

そして僕たちは 明日のことばかり 気にして生きている

そういえば 昨日の僕は 今日の僕に 希望を託してた

なのに僕はもう明日に全てを託してしまった

あ～あ 一体なにをやつてんだろ

まあいいや 聞違つちゃいないさ

田は昇り 僕たちを置いていく

そして全ては取り残されていく

あ～あ 一体俺に何が出来る?

まあいいや とつあえず 頑張つて 追い掛けるかな

それともこいつそ 違つうじいかに 走つてみるか

ひつひつてひつひも 明日はあるた

それだけは 間違つてないはずだ

文字数合わせの代わりに、『メントを書きます。

前回の“貴方に捧ぐ”。後書きで伝えたかったことが全く伝わって
ませんでした m (— —) m

あれは、（実際にあつた出来事は、こんなに深刻な出来事じゃない
から）“知らなくていい”と言いたかったんですが・・・・・・

いやはや、余計なことは書かないほうがいいのかもしません。

とか何とか言つて、『めやき』にも『メントします』

これ、結構前に書いたものなんですが、今まわり、こんな思いで
す。

“昨日の僕は今日の僕に希望を託してた”

“ なのに僕はもう明日に全てを託してしまった ”

もし私が、この瞬間に息絶えたら、後悔しか残らないでしょ？

でも、“僕”も私も、どうしたらいいのか分からないま、 “ 昨日 ” を振り返り、“明日”を追いかけ、“今日”に置いていかれるのです。

そして今日も、“なんとかしたい”と切望しながらも、結局また24時間を使い切ってしまいました。

この繰り返しの中、ぼんやりと不安を感じる、今日この頃です。

光一粒 風一陣

ほんの少し前 薄暗い雲の合間で 青空が輝いていた
一陣の風が 分厚い雲を 斬り裂いた痕 確かにあれは 現実だった
そう僕達が見た光 確かにそこには 空にあつた

幻だと人は言つて 世界はそれほど美しいもんじやないと
でも信じてみて 世界は思つたより 見所があるつて
知つてゐるだらう? 雲の向こうには 何処までも青い空が続いてる
んだ

風は起こせなくとも 感じることは出来るから 僕たちは空を見上げて
いるんだ

ほんの百年前 空の星々は 今よりずっとずっと 輝いていた
それは僕らが星に願つて 物語を紡いでいたからかも知れない
いやきっとそうだ

そう僕たちが忘れた歌が 確かに消えてしまった

馬鹿げていると人は笑う 世界はそんなにロマンチックじゃないと

でも見上げてみて 微かに残る光には 確かに物語があるから

聞こえるだろ? 微かな微かな光の粒が 静かに静かに歌う唄

ほとんどが失われても 全てが絶えた訳じゃないから 僕たちは空を見上げているんだ

信じてみて 雲の向こうに 空の果てには きっと何かが

信じてみて そこに僕らは 手を伸ばせる

風を起こせなくとも 光が見えなくとも 感じることは出来るから

だから僕らは信じるんだ 空を見上げるんだ

私は基本的に感覚で生きている人間です。
友人には否定されるんですが、少なくとも、そうなりたいと望んで

います。

だって、ややこしい説明とか、難解な公式なんかは、何かを理解するためにあるんですから、感覚的に理解できればそれで十分じゃないですか。

そう考えていいるせいか、人に何かを説明したり、教えたりするのは大の苦手です。

“最初っから言葉だけで全部伝えるのは不可能なんだ”なんて言いながら、小説家を目指しているんだから、困ったもんです。

「あればいい？」のせもやは 間違いなく貴方のカケラ
消すことも 田を逸らすことさえ出来ない
哀しい恋を引き止めるのが弱さなら 強くなれる気がしない
終わった夢を諦めるのが強さなら そんな力はいらない
ビーフしたって 謄められるはずもなく 足搔いて溺れていくんだけ
それでも 地球はまわっていく

「消すことも 『まかす』ことも出来やしない

ヒトの優劣を計算だけの知恵なら 消えてなくなればいい
後ろのことを言つて記にするくらいなら 全て忘れてしまいたい
ビーフしたって 僕は弱いまんまで もがきながら沈んでくんだ
それでも また朝が巡つてくる

哀しい恋を引かねるのが弱さなら 強くなれる気がしない

終わった夢を諦めるのが強さなら そんな力はいらない

びひたって 僕は弱い今まで もがいて足掻いて溺れていくんだ

それでも やうだとしても

せかい
地球はまわっていく

久々の更新です。

なんとなぐ、やる気がおきず、滞つてしまひました+（^ ^ ;）

この“E p p u r s i m u o v e”といつタイトル。ガリレオ・ガリレイが言った“それでも地球は回つている”といつ言葉の大元です。イタリア語なんですが、正確な発音も知らないまま、タイトルを使いました。w

何があつても、どんなに悩んでも、そんなことは関係なく地球は回つていま、朝はめぐつてきます。

それは希望であつ、何時も絶望でもあるといふことだ。

Once Upon A Time

昔々、あるとこで……

お伽の国が すぐ側に あつた頃
別の何かも すぐ側に 僕らの側に

晴れ渡る いの空に 夢の形の雲を探した

わざやかな 夢達を

笑顔 喜び ありつたけの幸せ
寄り添う二人 心踊る歌

全てがきっと 手に入る そう信じてた

描くのが 簡単過ぎて その距離が その価値が 見えてなかつた
お伽話が 僕を苦しめ 追い詰める

一番初めに 抱いた夢に 憧れに 手が届かないつてこと
皆ホントの“夢”だつてこと

そんな事実を 紛れも無い 真実を

知つてしまつたんだ

お伽の国が すぐ側に あつた頃
別の何かも すぐ側に 僕らの側に

晴れ渡る この空に 夢の形の雲を探した

ささやかな 夢達を

笑顔 喜び ありつたけの幸せ

寄り添う二人 心踊る歌

全てがきっと 手に入る そう信じてた

あまりにも そばにいすぎて 君のこと その価値が 見えてなか
つた

誰かの歌が 僕を苦しめ 追い詰める

一番最初に 愛した人に その腕に 手が届かないってこと
“さよなら”が絶対だつてこと

そんな事実を 歌つた歌 そんな歌を

誰かが歌つてる

お伽の国が すぐ側に あつた頃
別の何かも すぐ側に 僕らの側に

笑顔 喜び ありつたけの幸せ
寄り添う二人 心躍る歌

いつまでも いつまでも 幸せに……

この詩はかなり前に書いたものです。自分自身のイメージとかなりのギャップがあり、結構気に入っています。

前に小説に書こうと思つた台詞がありまして、どの小説に書こうとしたか定かではないんですが、内容はよく覚えていています。

“ファンタジーは人の夢なんだ。だから否定すべきもんじゃない”

正直、“全員幸せ。めでたしめでたし！”といつお話はあまり好きではありません。

現実から離れすぎた“幸せ”には意味がないと思つのです。

でも、日常にささやかな奇跡が起つる。そんな夢物語は信じていきます。

小さな子が 指さして笑う 大人達も おもしろがってる

シャッターをきる音 TVカメラも“彼”をつづ

狭い檻の中 ぐるぐると歩き回る 金色の影

虚ろな目が 見てるのは 太い格子なんかじゃない

檻の中で 生まれ育つた 風のにおいを 知ることも出来ない

でも彼の目は 草原を見ている 空の彼方を

閉じ込められた 若き王

お前の中に 流れる血は 草原の霸者 自由を纏い 天に吠えた王者のもの

見世物にされ 見世物として 死んでいく

自由を奪われ 手なずけられて 牙は折れて しまったのか

無限に続く その歩み 同じ所を歩き続ける

その顔を上げる お前はまだ 声を失つてないから

吠えてみせる お前の声を 聞かせてくれ 轟かせるんだ 王者の
誇りを

笑つた奴らに 教えてやれ

檻の中でも その牙は 折れてないこと

虚うな田は まだ死んじやいない

遠くを見つめ 空の色に染まつただけ

閉じ込められた 王 まだ折られちやいない まだ死んでない
まだ吠えられるから

顔を上げてくれ お前は王なんだから

“Mfālāmē”とは、スワヒリ語で“王”という意味です。

ちなみに“ライオン”は“Simba”。

正直、“Simba”って題名にしたかったんですが、あまりに知
られ過ぎてるんでこっちはしました。

でも、名前も含めて結構気に入っている一作です。

さてさて、“時は戦国”の後書きに書いた“うれしい事”、ここでも
お邊しちゃいますw

実は、先日、京都学園大学人間文化学会 “ケータイ学園文芸賞”
とこりのに応募しまして……

“優秀賞”！（－－）v

大賞は逃したけど、自信にはなります！

これから、これまで以上にがんばっていきますので、よろしくお願
いします！

田中 遼

似顔絵

大掃除の途中　がらくたの間に　見つけた　一枚の色紙
名も知らぬ　画家の卵が　描いてくれた　僕の似顔絵
十年という　でかい区切りに変わる寸前
その長い　時を経て　再び見つめ合ひ僕ら
絵の中の　小さな僕は　珍しく真面目な顔をしてるけど
やつぱり田は輝いてるんだ
死んだ田をしてる　今の僕と違つて
なあ何が違うのかな？　分かってるのは　たつた一つ
あの頃の夢を　僕は諦めて　手放して　見失つてしまつた
大体十年前　この似顔絵の頃　いつでも　笑つていれた
何よりも　希望や夢が　どんな時にも　輝いていた

十年近く 時が流れ ちょっとだけ背が伸びた今

時を経て 再び見つめ合つ僕ら

絵の中の 昔の僕は 真っすぐ 真っすぐこっちを見てる

僕がなくした 輝きを秘めた瞳で ただ僕を見つめてる

なあ何を見てるんだい？

教えてくれよ

君には何が 見えてるんだい？

僕には何も見えないよ

答えてくれよ……

似顔絵つて言つものは、なかなかすごいものだと思いませんか？

写真や映像と違つて、描いた人から見た自分が見えるわけですから、うまいかどうかは別にして（オイ）、結構貴重なものでしょ。

さてさて、詩の中に書いた、 “見つかった似顔絵” 。

お気に入りだつた黒い帽子を被つて、えらく真面目な顔をしている自分が可笑しいのと同時に、出来ればあんな頃に帰りたいなあと思つてしまします。

ま、そんなことを言つてたら、あの頃の糞生意氣な自分に馬鹿にされることは、分かつているんですがねえ……。

意味

昨日は何してたんだつけ？ 何となく覚えてんのが けだるさだけ
もつうんざりだ 誰か助けてくれ

無意味な日々 無意味な人生

死にたかないけど 生きてる意味が分からぬ それだけのこと
つまんねえことばっかだ 一瞬でもいい 楽しい何かをくれ

今日の空は 重た過ぎる 息苦しい程の曇り空

どこでくれよ 頼むから 光が見たいんだ

風も吹かない 雨も降らない 曇つたまま 曰がさすこともない

立ち止まつたままなのに 時間だけ過ぎていく

勘弁してくれ

中途半端な天気よか 嵐になつた方がマシなんだ

明日は何じよつ？ 馬鹿馬鹿しいや

今日も半端なこの俺が 明日を気にしているなんて 笑えてくる

心の中は曇り空 そもそも光はあるのかな?

分厚い雲の向こうを見れたことがない

風を待つてた 立ち止まつたままで

待ちくたびれて 走り出した時 風が吹き始めた

簡単なことだつたんだ

俺の生んだ微かな風が 頬を掠める

蝶の生んだ風が 海を越えて 風になるなら

この風は何処で何になるのかな

確かめに行こう 意味なんてないけど 知りたいから

今 生きる意味が分からぬなら

後で 生きた意味を探せばいい

さあ風を追い掛けるんだ

きっと 何かが生まれている

僕らの知らない何かが

生まれているはず

人生で3番目ぐらいに書いた詩です。

作った後で、ミスチルの“未来”という曲に良く似たフレーズがあることを知りました。

強調しておきます。“作った後で！”です。笑

ところが、詩の中に書いた“蝶が生んだ風”。

確か中国の故事かなんかだったと思うのですが、さなぎから孵った蝶の最初の羽ばたきで生まれた風が、海を越えて嵐になつたという話から引用してみました。

私の言葉が、私の知らないところで、何かになつているかもしだい。

やつ思つて、書を続けていきたいと思ひます。

世界が 僕らを置いて 変わらうとしている

皆が必死に 後を追い掛けてるけど 果たして それで良いのかな

行き先を知っているのは 行き先を決めているのは 誰だ？

答えられないのに 皆が走り出す 皆がいく それだけの理由で

“頭”がないのに “身体”だけが動きづけてる

そんのが 僕らの姿

先頭に 誰かがいれば いい訳じゃない

皆で考えるんだ

どこに行くのか 何故走るのか

考えるんだ

世界が 今明らかに 道に迷っている

皆が必死で 道を探しているけど 果たして 見つかるものかな

道から外れちゃったのは 道から逸れちゃったのは いつだ?

答えられないのに 道を見つけられる 訳がない

少し待つてみよう

草が倒れてる それで道があると信じてる

そんなのは 迷った奴の痕跡で 道じゃないんだ

なあ そりだろ?

自分で考えるんだ

どこに行くのか 何故迷ったか

考えるんだ

迷った世界についていっても どこにも辿り着けない

なあ そ う だ ろ ？

道連れに なることはない

考えるんだ

よく、長い行列を目撃します。

本物ではなく、人気があるもの（と、いうか、人が多いところ）に群がる人の多いことが多いこと。

自分が間違っているのかと、本気で考えてしまうこともあります。

でも、自分で考えずに流されるだけでは、大事なものは掴めないと思うのです。

「人気が高いから」ではなく、「良いと思つたから」で選んだものに、間違いはないでしょう。

少なくとも、「自分」を見失わずにすむとこつ点で、ずっとマシだろうと思つます。

自分で考へる。そして、思つとおりに生きる。

やつできれば良いのですが……。

Where Are You?

街の喧騒 人の談笑

外側のざわめきが 内側の静けさが

孤独を 悲しみを やらけ出す

ねえ 君はどこだい？

こんなに探しているのに ビビにいもいないなんて

本当に君は現実なのかな？

あの日々が夢だったなら こんな想いはしなかつた

こんなに孤独じゃなかつたのに

通り過ぎた輝きは 僕の胸に突き刺さる

交通渋滞 小さな期待 夜の街を歩く

君の世界と僕の世界

将来どこかで重なるのかな？

ねえ 君はどこだい？

こんなに求めているのに まだ見つからないなんて

神様が引き離しちゃったの？

もしさうでも 諦められるはずもなく

まだ君を探してる まだ奇跡を信じてる

よだかみたく僕も 星に向かっていきたいな

ねえ 君はどこだい？

こんなに求めているのに まだ見つからないなんて

本当に君は現実なのかな？

あれが本当に 夢であつたなら

こんな想い しなくてすんだのに

光の名残はまだ ここにあるんだ

「よだか」とは、富沢賢治の小説「よだかの星」の主人公のことです。

今この詩を読んでみて、「ここによだかを登場させるのは唐突過ぎるだろ?……」と思つたのですが、あえてそのままにしました。

夢だつたなら、と思つ現実があり、現実になれば、と思つ夢を見ます。

それが、自分が今を生きていっていないことの現われのような気がして、どうにも歯痒さを感じます。

国境の向い

見ているんだろう？ 聞こえてないのか？

苦しむ子供等 彼等を狙うハゲタカ 何故誰も助けないんだ

誰かを待っていて 動き出さない人々 誰もが偽善の涙を流してゐ

可哀相なんて 口に出すだけ 差し延べる手もないくせに

助けたいなんて 涙を拭つて 一体誰に言つてるんだ

国境の向い 当然のようだ 向けられた銃口

たつた今 引き金を引いた彼は 昔家族を撃たれた男

生きて ここにいること その価値も忘れ ため息だらけ

いつひょ前に悩んでる

ビービーして僕らは気付けないんだろう。ビービーして満たされないんだ
るう。

聖人ぶつても 理想を語つても 自分を捧げはしない偽善者

国境の向こう 同じ地球の上 そう同じ人の声 この命の鼓動

知つてゐるはずや

痩せこけた少女の僅かな希望

聞こえたはずや

死にかけた子供のはかない祈り

氣付いたはずや

奪われた者の微かな光

見ていたはずさ

瞳に秘められた輝きを

僕には世界は変えられない 彼らを救うなんて 騒りもない

愛の意味さえ見えない僕に 彼らの痛みなど知るよしもない

ただ 確かなことが一つ

国境の向こう 今もまた 向けられた銃口

引き金が引かれた時 吹き飛ぶのは 僕らと同じ 人の命

消えるのは 一つの光

マイケルジャクソンの“Earth Song”と“Man in the Mirror”、それにミスチルの“タガタメ”を聞きながら作りました。

どんなに悩んでも、自分ひとりでは世界は変わらない。

誰かを救えるほど偉くもない。

そんな自分に出来ることといえば、こんな詩を、こんな言葉を、書き続けていくことだけなのかもしません。

ガラスのカケラ

ただの飾りだと分かつてた　たいした価値はないと氣付いてた

ガラス玉の輝きが　僕らの日々を色々つて

壁越しの温もりが　僕らを包んでた

僕らは役者であつて　観客だったね

お互いが「理想」を　「幸福」を演じ合ひ舞台

空しさには田をつむつて　踊り続ける一人

そんな虚構はやはり　呆氣なく壊れてしまつて

部屋の中　無数に散らばつた破片

尖つたガラスは　切つ先を僕に向けた

君はこの部屋を出る時に　一体いくつの傷を負つたんだろう

あの敵意の塊は お互いの心から出たカケラ

君にもやはり 牙を向いたはずなんだ

直せはしない そんなことは分かつてゐ

それでもカケラを集めはじめた僕

指が痛くても 血が流れても

僕はまた一つ 破片を拾い上げる

どうせなら もっと粉々に

カケラも残らないくらいに壊れてしまえば 傷つかずにすんだのに

また一つ 傷が増えたよ

僕が間違ってるのかな?

壊れてしまつたものなんか さつさと捨てるべきなのかな?

でもまた一つカケラを拾つ

僕はゼロテープの 絆創膏のひめはせきが

傷そのものより

痛々しいことを知つた

自分で書つのもなんですが、ビーチもなへんな（ ）

時折、こーいったものを書きたくなるのですが、自分で驚きです。

笑

よく、「詩とか小説は実話を基にしてるのか?」ということを聞かれるのですが、どうにも答へにくいですね。

実話といえばそうであるよつたな氣はするし、完全な虚構といつてもいいよつたな氣もします。

まあとにかく、「よつたな氣」とは事実です！

多分、何の答えにもなっていないでしょうが、それはそれで。笑

ハンパモン

誰か教えてくれ 僕に 一体何が出来る?

こんな半端な僕に 意味はあるのかな?

なにもかも 出来ない訳じゃない 全て「中の中の

言つなりや 「友達以上の恋人未満」

そんで全てに振られてしまった

必死にならなくとも それなりに生きられる そんな風な奴だから

こんな足踏みをするんだろうな

誰か助けてくれ 僕はもつとしつかり 遠くに イキタイ

半端もんの癖に 描くものだけ大きいんだ

なにもかも 僕が変えてやる

そのために僕がいる

さもなくば 僕は何のために生まれたんだ

何のために生きてるんだ?

必死で言い聞かせても 誰より自分が疑っている

その言葉は 空しさを増すだけで

誰にも出来ない 僕だけの意味が欲しい

それが奢りだと 分かってるのに

未だに 望み続けているんだ

いやいや、一回にわたるセンター試験、ようやく終りました。

まあ、結果は氣にしないことにしましょ(>ー<・)w

わひと遠くへ行きたい。わひとつがつ生きたい。

でも、やっぱり時間を浪費してしまいます。

いつの日か、「あれも全部、じいに繋がってたんだ」と思える日が
来ればいいのですが……。

今のところ、後悔と疑問しか残つていません。

「全ひがいい思い出になる」なんて、本当なんですかねえ?

A MEMORY

一人きりでいる夜

寒さに負けそうな時

僕はいつかの一人を思い出す

寒空の下に一人

寄り添つて歩いた時

一瞬だけ触れた肩

白い吐息が混じった声

今をわれぞうな記憶の中

君がいる過去へ

また少し あの日が遠ざかつたのに

また少し 君を想つ時間が増えて

また少し 苦しくなつてしまつんだ

闇が迫つてくる時

悲しみに潰されそつな時

僕はこつかの君を想い出す

見つめ合う二人

どこまでも晴れ渡る空の下

微かに曇つた笑顔 切な過ぎた一言

優し過ぎた温もり もう戻れないMEMORY

もう少し 僕が大人だつたなら

もう少し 君と一緒にいたのに

また少し 苦しくなつてしまふんだ

一人きりの夜

胸が締め付けられる時

君を思い出す僕

優し過ぎた温もり もう戻れないMEMORY

最近の傑作です。笑

一息で完成させたように記憶しています。

これとは別に、友達とのメールの流れで閃き、思わず相手に送つてしまつた言葉があります。

「未来より過去が欲しいなんて笑える」

笑えるんだか笑えないんだか。

過去が美しく見えるのは、「もつ戻れない」からなのかもしません。

いつか貰つた お別れの色紙を取り出して
皆の言葉を見ていた

色んな奴がいたなあ なんて ちょっと漫つてたりして
センチメンタルな言葉を見つけた

なんてことない台詞なのに 何だかひどく苦しく

「また会おう」なんて

お前とはあれから会つてない

ただ 夢を追いかけ 追いかけ

走り出したと聞いた

今どこにいるかは 知らないけど

成功を 幸運を祈ってるよ

一人一人を思い出させる 別れの言葉

色んな奴の 色んな想いを見た気がした

かわいいあの娘の言葉が見つからなくて

探し始めて思い出した

黒く滲んだ一行に 君の名前が見えた気がした

塗り潰したわけじゃなさそうだけど

かされた文字はとても読めない

何を書いたの？

この染みは何を言つてるの？

なんだか切ないね……

でもその黒い染みに

僕の欲しかった言葉がある

そんな気がして

嬉しくなるんだ

義務教育の間、三回ほど転校を経験しました。

大半の奴らとは、その時別れたつくり、会つていません（まあ、当然かもしれません）。

手紙をくれた奴にも、全く返事をせずに終わつてしまつたり（^_^;）

久々に「寄せ書き」を取り出してみて、「あいつら、一体どうじてるんだが？」と思つたりしています。

サヨナラゲーム

九回の裏 一点差 ノーアウト一塁

誰もが息を殺して見守る中 打席に入ったのは

僕じゃなかつた

守備固めで ベンチに下がつた 四番バッター

彼はどんな思いで 試合を見ていたのだろう

グラウンドをじっと見ている彼は

仲間を信じるしかない

どんなドラマチックな話でも

自分が主人公じゃないことを 知ってしまった

九回の裏 一点差 ツーアウト満塁

誰もが手に汗握る場面 打席に向かうのは

僕じゃなかつた

誰よりも打席が回る一番バッター

でも 僕はこの場面に 選ばれなかつた

どうするにも出来ず

勝負を見守るしかない

どんなに自信があつても

打席にいない僕に ホームランは打てない

チャンスをもえなかつた男は

ヒーローになりそこねた

どんなにドラマチックな場面でも

打席にいない僕に

ホームランは打てない

そういうば

チャンスをもつた八番バッターは

初球を振り抜いた

ボールはまだ飛んでいた

この詩は、友達と話をしている時に思いついたものです。

その内容というのが、「あの娘は“ストライク”か“ボール”か」という真に馬鹿な内容だったのですが（意味、分かりますよね？w）、二人して散々「暴投」だの「危険球」だの言い合った後で、気付いてしまったわけです。

「俺たちは、打席に立つてすらいないんじゃないじゃないか…？」とこうこう笑

残念な話です。

ガードレールに寄り掛かつて 流れる街を見ていた

ヘッドライトは 眩しいけれど

照らして欲しい場所は暗いまま

誰か教えて欲しい

光の当たらない場所に

花を咲かせる方法

命を見出だす方法

街のあちこちに 生きながら死んでいる人達

僕もまた その一人

戦つて負けた訳じゃなく

戦う前に投げただけ

勝者にはなり得ず

負け犬と呼ぶべき代物

誰か知ってるかい？

僕はどうすれば良かつたのかな？

なにもかもが もう遅い

カツコイイ敗者にはなれず

勝ちのビジョンは見えない

八方塞がり行き止まり

でかいゲームの後 ふと上を見ると

薄汚れた天井に 不思議なくらい 人の影が映つていて

ぼんやり見とれてしまったんだ

誰か知つてるかい？

あの影とこっち側

どっちがホントの現実なのかな？

僕にはどうしても分からぬ

生まれて死んで 生まれて死んで

繰り返すだけ

影と何が違うって言うんだ

生まれて死んで　生まれて死んで……

天井に映る影が　僕らのリアル

「戦う前に投げただけ」の勝負があります。

いつも、いつも、いつもかりかりをつけたことの出来なかつたものばかりが、目の前をすりつきます。

とはいへ、そこに帰る道があるわけでもなく、後悔している間に次の「勝負」が行き過ぎてしまうのです。

どうしたら良いんでしょうかね……？

青い空

風が吹いた時

見えやしないのに

行方に田をやる

空の向ひの空にある

見たことのない何かが

見える気がしたから

いつの日かなんて

むなしでのまま

空を見てるんだ

空に放つた願い

めうとい早うとい言じてた

どんなに強く願つても

空を飛べるわけはないのに

あの空の向ひにあるのは

やつまつ遠屈な世界なんだうつか

鳥が空を横切っていく

僕らにはない 彼らの宝

何物にも変えられない

皿田三のがつがつ翼

人には遠すぎて 届かない空

そこは彼らの場所

空の向こうが 素晴らしい場所とは限らない

それでも人は空を見る

風に心をのせ

想像の翼で羽ばたいて

そうやつて

人は生きていく

空に放つた願い

あつと届くと信じてた

無邪氣過ぎたのかな

放った小鳥が帰るはずもないのに

あの空の向いにあるのは

やつぱりただの

退屈な世界なんだろうか

やつぱりただの

青い空なんだらうか

「手の届かないところにある葡萄はすっぱい」

負け犬ならぬ、狐の遠吠えですが、実際どうなんでしょう？

どうせ届かないなら、「あれは素晴らしい物なんだ」と思っていた
ほうが上に向いていけるような気がするのですが……。

上を見すぎて、足元の小石に躊躇^{ちゆうしゆ}になりそうですが、笑

一人の奇跡

この広い世界の片隅

偶然の出会い

運命の二人

君がいて 僕がいて

突然舞い降りた魔法

一目惚れなんて馬鹿にしてたのに

目があつた瞬間

生まれた直感

二人はこの時のために生まれた

運命なんでものがあるとして

それは一人のための輝き

奇跡だと君は言つけど

今ここに一人がいる

それは変わらない景色

君の道

僕の道

全ては「今」に通じていた

そんな気がして

全てが意味を得て

輝き始める

二人の信じる未来 ファンタジーみたい

だけど叶えたい

だから祈るんだ

君がいる今を忘れないように

明日も君の隣にいれるように

いつまでもこう祈れるように

奇跡だと君は言つけど

それでもいいから一緒にいて

ずっと変わらない景色

奇跡だと君は言つたび

今ここに一人がいる

それは変わらない景色

これは確かに 奇跡

これは紛れもないファイクションです。笑

つて、そうだと相当「痛々しい」……？

じゃ、実話つてことで！（オイ）

これは「RADWIMPS」の「ふたり」との歌詞を知ったすぐ

後に書き始めました。

それから、小田和正の雰囲気も混ざつてるかな？

自分で、こんな「幸せ一杯」の詩が書けたことに驚いています。笑

開 闢 さ る い な い 街

朝との境目が迫る頃

赤い日をこすりながら

大通りをゆっくり歩いた

昨日少し飲み過ぎて 頭が重い

でかい思いを抱いてこの街にきてから

ちよつと十
年

そろそろ むなしで生きることに

疲れてきたんだ

一緒に夢を追いかけてきた仲間達

昨日も最後まで

誰も諦めちゃいなかつた

でも それでも

僕は手を放してしまつた

お前ら 絶対諦めんなよ

絶対に未来は開ける

僕にそれを待つ力がなかつただけなんだ

頑張れ

負けんな

最後に歌つた 応援ソングを思い出しながら

夜明けの風の気配に身を委ねてた

眠らないこの街で

一体いくつの夢が

音も立てずに

崩れ去つたんだろう

眠らないこの街は

夢を見ない

ここにはただ リアルがあるだけ

人は夢をなくしては 生きられないから

この街が 冷たく見えるのかな

でも人は 夢の中では 生きられないから

この街で 光を目指すんだろうな

一方夢を捨てた僕は

夜が明けて

本当の

空しさを知るんだ

「眠らない街」とは、「東京」です。

東京に住んでいて、「ここ」にサクセスストーリーが落ちているとは全く思えないのですが、それでも、かたくなに夢を描いています。

「成る」かどうかは別にして、「何か」にはなると信じて……。

街の灯

友達と別れた後

暗い電車の窓

僕は一人きりで

「彼」と向き合つた

街の灯を背に

浮かび上がつた暗い顔

さつきまでの

「笑い」の仮面も

いつの間にか

剥がれ落ちていた

通り過ぎる

あの街を 歩くことなど

もつないけれど

忘れられない想いが

そこにあるんだ

大音量のイヤホン

流れるのは悲しい響き

僕は一人きりの 放浪者なんだ

美しい旋律に乗つて

聞こえる優しい声

問い合わせるように

諭すように

語りかける

通り過ぎる あの明かり

届くはずもないから

ただ輝いているだけなんだ

手にしたカードは

簡単には捨てられず

切り札には出来ない

でもそんなカードでも

勝負しなきゃならない時もあるんだ

行き過ぎのあの街を歩くことなど

もつないけれど

あの輝きは忘れない

僕らがいた痕

行き過ぎる街

この中で「僕」が聞いているのは、The Eaglesの「Desperado」です。

この曲を知らない人は、ぜひ聴いてください。

そして、出来れば歌詞も調べて、なんとなく頭に入れて曲を味わってみてください。

真冬の夜、街中を走る電車に乗りながら聞くと、心臓が締め付けられるような思いがします。

押し寄せる波

じりじりいる時

見えない流れが

僕を追い立てる

先へ先へと 転がるよつこ

でも僕は行きたくなくて

流れをさけて

せりつけとしだんだ

道を探してもよう僕に

襲い掛かる荒波

逆らおうとした訳じゃないのに

人々は僕を敵と見なした

誰であろうと

異端者を許さない世界

僕は沈み始めた

生きている限り

人がいて

彼らが僕を追い立てる

前へ前へと 突き飛ばすように

でも僕は 迷つてしまつて

流れに負けて 溺れかけてる

助けを求めても

降つてくるのは 嘲弄だけ

流れに逆らつ強さより

波に乗つかる軽さがほしい

誰しも強い訳じやないだろ

賢しく生きて何が悪いんだ

弱い癖に 重たい僕は

ただ沈んでいくだけ

でも

強さがあれば

迷うこともないのに

そんなことを考えている

「流れに逆らう強さより 波に乗りかる軽さがほしい

どちらもないから苦労するんですね。笑

強けりや強にに越したことないんですけど……。

今は溺れかけてますね。苦笑

穴あき四次元ポケット

輝いていたのは僕か 世界か

昔々 僕は幸せだった

毎日新しい幸せが降つてきて

その上いつも一つ一つが 生き続けて

僕のポツケで 暮らしてた

でも知らないうちに そこに穴が空いた

何をやっても

誰と話しても

破れたポツケからは

何も見つからない

出でこない

過ぎ去ったあの日々は もう戻らない

昔々 僕のポツケは4次元で

いっぱいになることはなかつた

それでも僕は 満たされていた

でもいつからだろう

何もないところばかりを見はじめた

幸せと幸せの 隙間に日々を向けた時

四次元は四次元でなくなつて

ポケットもポケットでなくなつた

そして全ては 失われる

なくしたものばかり 気にするのはやめたいのに

僕が見ているのは 後ろばかり

穴あきの ポッケの中に 手を突っ込んで

僕はまたとぼとぼ

歩き出すんだ

「僕は世界一不幸な少年だ～っ！～！」

のび太君の名台詞。

ドラえもんといつ、超ジョーカー的な存在を手に、何を言つてゐるん
でじょ。笑

まあ、これは極端な例ですが、似たようなことはたくさんあります。

自分が不幸だと思つより、幸福であることに気がつくがよっぽど
いいと思うのですが……

それがとてもなく難しいような気もします。

スペキコト

「逢いたい」なんて

ありきたりな言葉を並べ

何か出来ると思ってた

何か変わると思ってた

生きるべき時

いるべき場所で

一人きりになつたとしたら

人は留まることが出来るだらうか

孤独に耐えられるのが

最も強い人だと聞いた

一体どこに そんな人がいるんだろう

想像も出来ない

「寂しい」なんて

一人で呟いてみるだけ

何か分かると思つてた

何か変わると思つてた

知るべきこと

学ぶべきものが

田の前に溢れ返っている今に

本当に手にすべきものは何だらうか

愛を手に入れた人が

最も幸福なんだと聞いた

一体どうすれば 君に伝わるんだひつ

想像も出来ない

「愛してる」なんて

届くはずもない言葉なのに

何故か頑なに

君の心に響くと

信じてるんだ

言つべれり

伝えるべき想い

ありふれたものが

こんなにきらめいて見えるのは

何故だろつか

星は届かないから

美しいんだと聞いた

一体どうすれば

そんな言葉を忘れられるんだろう

想像も出来ない

「逢いたい」なんて

ありきたりな言葉を並べて

何か出来ると思つてた

何か変わると思つてた

この詩もまた、中島みゆきの「たかが愛」に似たようなフレーズを発見しました。笑

「参考にした」わけでもなく、たまたま似ていると、なんだか悔しいような、がっかりなような、そんな気分になります。

ここに一首。

何となく、
案外に多き氣もせらる、
自分と同じこと思ふ人。

石川啄木

流石です。笑

部屋中に散らばった パズルのピース

作り始めて やつと気づいた

きりがないって

何ピースだ？

どんな形だ？

一体どんな絵が出来るんだ？

そんなことすら知らないで

一人で部屋で うずくまつてゐる

一つづつ 拾つてみては

ぴったりとはまるピースを探すけど

見つからなくて

また投げて

別の一つに手が伸びる

端っこを見つけると

偉そうに諭されもした

でも 見てくれ

どこにもないんだ

そういうのは

誰一人解けたためしがないはずで

誰にも解けるはずがないもの

だけど解かなきやいけない気がして

部屋中に散らばった パズルのピース

何が出来るか

まだ見えないけど 進歩はあった

何ピースか

どうにかペアが ぴったりはまり

一応何か

形が出来る気がしてゐる

だけどまだまだ 先は長そう

一つずつ

含ませてくしか ないけれど

はあるピースは 一つだけ

この部屋中に 散らばった

ピースの中の

一つだけ

端っこにしつづくまつ また次のピースを捜す

ふと思つた

何かに似てると

そう何か

手掛けり〇で

ややこしい問題

誰一人解けたためしがないもので

誰にも解けるはずがないもの

だけど解かなきゃいけないものなんだ

世界がパズルだとして

一つ一つのピースは 僕達で

そこには出来る絵は コートペア

それぞれがそれぞれの居場所を見つけ

無駄も余りも

止も止も ない世界

いるべき場所に

僕らがいれば

きっと見えてくる

だから探しつづけるよ

誰かの隣にある僕の場所

僕といつピースのはまる場所

たつた今 合わせたこの一つが

君と僕なら いいのにな

そんなことを思いながら パズルを続ける

今、世界が歪んでいるのは、人が「いるべき場所」に という
か「いたい場所」に いないからではないでしょうか。

全ての人生に「意味」があるとしたら……

それぞれのぴったりはまる場所が、どこにあるはず。

この「世界」という「パズル」が完成したなら、そこはまさに「^ユ理想郷」。

そう、信じています。

死にたくない

嫌だ

生きたい

だけど世界が

それを拒んだ

立ち止まつた僕に

空がのしかかつてくる

僕は蟻のよう

潰されてしまうんだ

見捨てられた奴は

野垂れ死ぬのがオチ

傷ついた魂は

同じような身体を求めた

闇の中で 独り

取り出す カッター

かさぶたの下

脈打つ 命

死んだ目の代わりに

手首から流れた涙

不安を痛みで

塗り潰そうとして

身体をなぐる刃

傷つきながら生きるのは

僕のせいなのか？

不安に襲われる夜

命を見失った時

世界に拒まれた男は

何をすればいい？

僕がにぎった答えは 正しくなんかない

でも他に一体どうすればいい？

誰も教えちゃくれないから

いりあるしかない

びいにも行けぬま

また今日も

叫べない唇の代わりに

傷が口を開くんだ……

びいじょいつもなく暗い気分なので、びいじょいつもなく暗い詩を公開する事にしました。

題名を見ての通り、「リストカット」が題材です。

びいじょつか?笑 (いんなこと聞くのも初めてなんですが(=)

テーマが重いだけに、「知った氣になっているのかもしれない」と、少し不安になっています。

「不快に感じられたらすぐにお消しますので、」指摘ください。

ひしひくお願ひします。

田中 遼

奇跡を……

たいしたこともしないくせに 時々 毎日疲れちゃうんだ

そんな時 いじじやないどこかに行きたくて

それでも 動き出すのも億劫で

そんな時 君に逢いたくなるんだよ

そんな時 僕は柄にもなく 空を見上げて

神様に祈ってるんだ

神様 お願いです たつた一度

生涯に一度きりで十分です

俺に奇跡を

奇跡を下さい

たいしたことのない僕だけど 一度位 奇跡が起こること願つてゐる

こんな時 君に逢いたくなつてゐるんだ

こんな時 心の中が疼き出すんだ

苦しいよ 助けて下さい

こんな時 僕は暗い部屋で つづくまつて

神様に叫んでるんだ

神様 お願いです 僕を救って下さい

この苦しみを除く奇跡を

奇跡を下さい

君に逢いたくてたまらない

だから 柄にもなく 空を見上げて

神様に頼んでるんだ

神様 お願いです ほんの一瞬

生涯に一度きりでもいい

俺に奇跡を

奇跡を下さい

どうか奇跡を

奇跡を下さい

「まわ」、「苦しい時の神頼み」。

「Season」で、翔太に言わせようとした詩です。

実際、翔太はこんな心情だつたんじゃないかな、と思します。

と、まあ微妙に宣伝してみるわけですが、完結させたのに感想も評価も来ないことに幾分ショックを受けています。

やれやれ、こんなもんなんですかね？

まあ気が向いたら、感想やら評価やらをいただけると嬉しいです。

あ、もちろん、「楽譜のない歌たち」もどうぞよろしく。笑

田中 遼

素直な唄

部屋の隅 一人きり ギターを抱え

平凡なラブソング 作っていた

「君に捧げる」なんて 恥ずかしいけど

まさに「そのために

奏でる音

まさに「そのために

CDにある歌

カッコつけ

飾り立ててる

この僕が

素直に素直に

想つ」と

まつすぐまつすぐ

想つ君

だから

素直に まつすぐ

伝えたい

「好きだよ

「愛してゐる

「あまこで

すうじゅうす

僕のそばに

誰もが耳にした

スターの奏でるラブソング

僕にましても

似合わないけど

まさにそれこそ

望む音

まさにそれこそ

僕の憧れ

少し気取つて

異国の文字を並べても

みつともないほど純粹なこの想い

ただひたすらにまっすぐなこの気持ちは

伝わらない

「好きだよ

「愛してやる」

「なぜまに元気」

「まつといまつ」と

「かみをくわぐわくわく

名曲なんて 作れない

かつこよくなんて 喰えない

ただ 素直に まつすぐ」

「好きだよ」

「愛してる」

「そばにいて

「あいつをひとまずかにね」

ただ それだけの唄

先日、友達に誘われて行ったライブハウスで、一番最初のバンドが一番最後に歌つた曲（どうにもややこしいですね。笑）を聴いた時に思いついた詩です。

一番始めに思いついたフレーズは「カツ」口つけて アルファベットを並べても この想いは伝わらない。」、といつものだつたのですが、作つていふうちにそのフレーズが消えてしまいました。f (^_^;)

いやはや、それにしても、「作曲」といつ偉業（俺の意見です。笑）を成し遂げられる人がうらやましい。

誰か、この「詩」を、「歌」に変えてくれませんかね？

と、一応頼んでみるとします。笑

輝いてる君へ

驚かないで

君はいつでも 輝いてるよ

君は認めないけど

君は素敵なんだ

だから俯かないで

胸を張つて

自信を持つて

人とは多分

内側から 輝くもんで

君もそう

君のなかから

光輝く

見えない魅力

だから 素敵なんだよ

自分信じて

君は絶対 捄むはずだよ

みんな知らないんだ 君は思ったより強いつて

だから止めようとする

だけど僕は

背中を押すよ

夢を追う分

人より少し辛い命に なるかもしねない

けれども多分

君はやるべきだから

背中を押すよ

この世界には

優しいことだけじゃないって 何か言ひたい

だからこそ

優しく生きてこいつって

思うんだ

忘れないで

君はいつも 輝いてる

君は誰より 素敵なんだよ

君はなんでも 掴めるんだよ

忘れないで

僕がそばにいるよ

はい。

「かなり恥ずかしい詩だなあ」なんてことを思いながら載せていました。

「だからこそ 優しく生きていこうって 思つんだ」

これ程までに、自分に合わない台詞もないかな、と。笑

だからこそ掲載に一の足を踏んでいたわけですが、出来としてはなかなかだと思っています。

ま、やっぱり、いわばゆい氣もするんですがね。笑

ただただ歩いてきた

薄明かりの中

田の出の瞬間を待つていたんだ

何となく明るく見える方に

一歩一歩を

踏み締めながら

求めていたのは

「ゴール」なんかじゃなかつた

何かを掴めれば

何かになれば

それで良かつた

自分にも

何かが出来るはずだと

自分にも

何かをやれるはずだと

夢に手を伸ばしていた

でも

まだ

日は昇つてくれない

ほんの少し

ほんの少しだけ

芽生えた疑惑

このまま夜が明けなかつたら?

このまま光が届かなかつたら?

目を凝らしても

僕にはもう

明るくないつづあるのか

暗くなつたつあるのか

それさえ分からんのだ

僕には「何か」なんてなかつたのか

僕はやつぱり

何者でもなかつたのか

答えてくれる人はない

薄暗い

昼と夜の境

一体どうして変わったのか

僕の持っている

「何か

僕の中にある

「何か

それがなんなのか

まだ分からぬけど

とりあえず

今

太陽が

夜に

闇に

打ち勝つた

実のところ、まだ日の出は見れていません。

薄明かりは見えているような気はしているのですが、また少し暗くなつたような気もしています。

自分に「*Something*」^{何か}がある。

そんな淡い希望を抱き、西か東かも分からぬ地平線を見つめ続けている毎日なんですが……。

朝焼けも夕焼けも、綺麗なことには変わりない。

なんて独りで呟いていたりもします。

田中 遼

A d r e a m

冬の冷たい空氣の中

“ずっと眠っていたかった”

そんな風に思いました

僕の未来に

君がいないことも

君の世界に

僕がいないことも

分かつてはいる

分かつてはいる

そう だから

こんな叶わぬ夢を見るより

悍ましい悪夢の方が

ましなんだ

恐怖と共に

飛び起きたとしても

胸がしめつけられる ことはなく

込み上げるものもない

すぐ別の

夢を見れる

忘れられる

すぐそこには

君がいて

君と笑つて

幸せになる

リアルだけど

叶ひことはない

夢でした

冬の冷たい空氣の中

“ずっと眠っていたかった”

そんなことを 思いました

僕の視界に

君がいたとしても

君の夢には

僕の姿はない

そのくらいはわかってる

そう だから

これは

届きたいだけ

永遠に叶ひはずはない

夢なんだ

体中が震えだして

涙が溢れて来た

胸が痛んで

生きるのも嫌になった

夢の中の幻に

君の姿を

見ただけで

ただそれだけで

すぐそこに

君がいて

君と笑つて

幸せになる

そんな切なく

淋しい夢が

覚めました

もしかしたらと

外を見ても

“もつと眠っていたかった”

なんてことを思つただけで……

僕の期待は

虚しいものだけど

君の言葉には

君の笑顔には

君の姿には

きっと力がある

何よりも

強い力が

そう だから……

なんだかんだで五十個田の詩です。

一応（？）節田なので、どの詩を持つてくるか迷いましたが、結局、「なんとなく」で選びました。

「冬」なので季節は違つし、作った時期も2、3年前でタイムリーでもなんでもない。

本当に「なんとなく」、です。

ま、この詩集 자체が（そして作者自身も）そんな感じですので、「

「れでいいんだ！」、とも思こます。笑

田中 遼

昨日見た夢

夕べ突然

夢にお前が現れた

名前も一瞬出てこなかつたのに

一緒に飲むのは違和感なくて

なんか笑えた

別に親友でもない

特別仲が良かつた訳でもない

何もかもが正反対だった

でも

嫌いじゃなかつたんだ

妙に遠いあの頃

俺もお前も

まだまだガキで

諦めを口にしながら

まだ来ぬ未来に

期待を抱いて向かつっていた

走り出していたんだ

誰もが夢を描いた

あの頃

たまたま近くにいた

それだけの仲

でもだからこそ

懐かしくなる

会いたいのは

お前と

あの頃の俺

夢の中でお前は

疲れたように笑っていた

今の仲間と同じように

一体何なんだ？

空はそんなに重いのか？

目指した場所が

のしかかつてくる今

飛び立つ間際に羽をもがれた雛鳥

ビニに向かえば良いんだ?

誰か教えてほしい

妙に遠いあの頃

俺もお前も

ただ知つていた

足が折れても 腕をなくしても

進まなきゃならない

翼をもがれても 目が潰れても

諦めひやいけないんだ

誰もが夢を見ていた

あの頃

今よりずっと

何も知らなくて

今よりずっと

見えていたものがあった

会いたいのは

お前と

あの頃の俺

田覚めた後

思わず打った

お前宛てのメール

でも

何か違う気がして

今もまだ

送れずにいる

おかしなもんで、最近よく「あの頃」の夢を見ます。

「帰りたい」なんて言つてゐたのは今に始まつたことじつとなつた。元のことをやめにした。

それに最近じや、「諦め」を口口にする、なんてこともしなくなつたからな。

自分が素直になつたからなのか、それとも本心では諦めてしまつたからなのか。

ともかく、あの頃とは違つんだなあ、なんて思つたりしています。

昨日見た夢（後書き）

「夢」が続いてしまいましたが、この詩はどちらかいついても今日出したかつたので……。

猫の声

薄暗い路地

汚れたゴミバケツの横

腐った臭い

虚ろな目をした子猫

暗く 冷たい

夜の雨

捨て猫は震えているだけ

猫は何も知らない

温もりも

幸福も

だから求める事もない

ただ

目を閉じたとき

浮かぶ景色がある

太陽の降り注ぐ草原

そこに王がいる

夕日に輝くたてがみ

戦きを呼ぶ咆哮

眩しい程の姿

子猫のまぶたの裏

夢の輝き

汚れた路地に生きる子猫

小さな牙をむいても

声を張り上げても

戦ぐ者はなく

ただ 嘲笑うわされるだけ

ただ猫だけは気付いていた

自分の中に

同じ血が

同じ遺伝子が

眠っている」と

それが叫んでいる」とも

ライオンになりたい

草原の中で

風に吹かれる霸者に

大地を轟かす

誇り高き

唯一の王者に

笑わせはしない

でも

いくら目を覆つても

いくら耳を塞いでも

風が吹くたび

息をするたびに

この場所の臭い

何かの腐敗臭が

猫を 現実に

引き戻す

汚れた

ずぶ濡れの子猫

小さな小さな細い声は

涙まじりの

「ライオンになりたい」。

このワシントフレーズを入れたくて作った詩です。

暗い路地裏。

そして鼻につく腐敗臭。

それでも、生きていかなければならない子猫。

今ここにある現実と、さして変わらない気もします。

仕事の合間

故郷と違う

濁つた空を見上げる

何故だらう

空が妙に遠いんだ

夢を描いて

切符を買った

光を日指して

ここにきた

なのに 思つたより

壁が大きくて

「明日がある」なんて言葉で

ごまかしてるんだ

欲しかったのは 「れじやない

こんなんじやない

でも また 「今日」 が始まつてしまつんだ

時間がないなんて

言い訳を繰り返して

自分が頷くはずもなく

流れているだけの

自分が悔しくて……

強くなるため

飛び出した

力が欲しくて

ここにきた

なのに 無力さだけが

この手に残る

愛しい人も守れぬ僕に

夢がつかめるわけもないんだ

欲しかつたのは

金や権力や名声じゃない

ただ 夢を見ていた

ガキっぽい夢を肴に

飲み明かした日々

あの時 僕は

輝けていた

おい 相棒

お前は今 何してる?

こっちの気も知らないで

突っ走りやがつて

なあ 僕はどうすればいい?

どうすれば

お前が誇れる

俺になれる?

こんなこと聞いたら

また笑うんだろうつな

俺は今

お前に会いたい

なあ相棒

お前

今

何じてる？

昔使っていた古いノートを開き、この詩を発掘しました。

いつ書いたのか、どうやって思ついたのか、もひれてしまつた。

だから、この「相棒」が誰なのか、わざわざ出せません。

ただ、頭をよぎるのが何人か……。

もじ仮て、その中の誰かと申ゆることがあったとしても、ゆかの「連呼」を思ひ出す（もじへせゆひ出す）ことがなければいいなと思います。

相棒へ（後書き）

P · S ·

「連呼」を知らない人は聴いて下さいな。笑

ちょっと悲しいですけど、いい曲です。

後悔ばっかの人生

この道は間違いだったなんて

いつも思つてゐる

もつもつとさざつだ

後悔してゐる自分に後悔して

そんな無駄なことを繰り返してゐる

可愛いあの娘を 泣かしたこと

監の前で 泣いてしまったこと

調子のいい馬鹿をやつたこと

どれも人生最悪の記憶

「でも今じゃ良くなって出

そんな日が来るさす

心ひして嫌なことばかり

思って出してしまつんだ?

わひと同じへりこか

それ以上こまごともあつたはず

今も起きてるはずなんだよ

謝つたら許してくれた あの娘

皆して慰めてくれた あの日

最後に皆で笑った あの時

そんなことを思い出したんだ

可愛いあの娘を 泣かしたこと

皆の前で 泣いてしまったこと

調子にのって馬鹿をやつたこと

でも今じゃ良い思い出

そんな日も来るさ

良かったことも悪かったことも、それなりに覚えていました。
とにかく、きっかけさえあればいつでも思い出せる、といった感じ
でしょうか。

そして何より、鮮明に浮かび上がるのさ、恥ずかしい記憶。

何度も同じ場面を思い返しては、一人でイライラしたり、苦笑いを
浮かべたり……

「俺の馬鹿野郎……」なんて言つてみたり。笑

まともかく、あとと「良い思い出」になる日も近いでしょう。

— ()

なんだか淋しいよ

人気のない校舎

僕らの母校は 風が中を歩くだけ

僕らのサインを見る人は

もういない

時々 近くを歩いてみると

校庭の木々だけが生きているんだ

俺達の母校の名前

ついに消えてしまった

今まで駅の案内に書かれてたのに

そこに今日

黄色いテープが張られていたんだ

馬鹿だつたなあ

でも楽しかったよな？

できるならあの頃に帰りたい なんて思つちやうんだ

今

あの机は何処にあるのかな？

誰が使つているんだろう

それともすでに

燃えぬきでこるのかな……

僕だけなのかな？

いまだにあの頃が懐かしいのは

皆と会いたいのは

みんな“交差点”から離れていく

そう 僕も

思い出になっちゃったんだね

僕は少しだけ後ろを振り返ってるよ

あの教室は不思議な場所で

いろんなことが起きたっけ

たいてい笑いになつたけど

今思えば凄いこと

仲良かつたよな

そりや馬の合わない奴もいたけど

楽しい日々だった

今

あのボールは何処にあるのかな

お気に入りだつた

バスケットボール

生意気なあいつらが使つてゐるといいな

帰り道

いつもの道を通つてみたよ

三人でずっと通っていたね

僕らは君と歩きたくて

君に追いつくよ

君が追いつくよ

歩いてた

家に着くまでずっと　君を探した日もあつたんだ

馬鹿だつたなあ

偶然の振りをして

できるなら　これがずっと続けばいい　なんて思つてた

あの時は全てが面白かった

今とは違つて

学校がなくなつて

思い出だけが残つてゐる

僕は少しだけ

振り返つていよう

少しだけ

漂つていよう

あの日の中で

これはリアルです。笑

それでなんとなくこの詩を載せるのを躊躇っていたのですが、友人からリクエストを受け、「んじゃあ載せてみるかあ！」と決意し、更新に至りました。

まあ小っ恥ずかしいので、あんまり詳しいことは言わんでおきます。
笑

風の如く

人と人とで 関わる中で
言つてはならぬこともある

真実を口にして傷つくのが 惡いから
とつやに黙つた弱き者

本音で生きるべきなのか

建前で上手にかわすのか

あつと賢く生きるなら

迷つ意味すらない場面

でも毎日しても ためらつ人が いじてゐる

そんな姿を 知つて猶

氣付かぬ振りで 過ごすのか

風にでも なつたつもりで生きるのか

首に巻き付く鎖さえ

氣付かぬ振りで済ますのか

そんな自由はないだろ？

お前はただの 「ヒト」 のだから

逆らいたい訳じやなく

ただ自由が欲しいだけ

なんて言つても

その違いさえ分かつてはいないんだ

しがらみから逃げたくて

足搔いてもがいて

どこかに転がりうとしていた

輝ける未来の方へ

どこにも行けはしないのに

そのことを 知つて猶

ただ闇雲に 突き進むのか

あの星に手を延ばしたまま生きるのか

地べたに張り付く 自分の姿も見もせずに

自分を騙し 強きを願う

お前はただの「ヒト」なのだから

風の如くに生きるのか

星を田指して進むのか

縛られたまま

張り付いたまま

空を見上げる

ただの「ヒト」

『風にでもなつたつもりで生きるのか
首に巻き付く鎖さえ

『気付かぬ振りで済ますのか』

このフレーズがすごく気に入っています。笑

「所詮所謂只の人」といった感じの詩ですが、その同じ「ヒト」が世界中で様々な「すごいこと」（すごいもんはすごい）と言つしかな（い）でしょう（笑）をやらかしていくことを考えると、そういう観的になることもないのかもしません。

真夏のあの日

全てを焼き尽くす光

大地を震わす轟音

あの日

ヒトは一線を越えてしまった

あの日

ヒトは地獄を知った

あの日

ヒトは許されない罪を犯した

数多の命が

容赦なく 踏みにじられ

空に消えて行つた

何の意味があつたのだろう

あの戦の後

一体何が良くなつたのだろう

少し考えてみないか？

あれから

ヒトの間に生まれたのは

安心なんかから程遠いもの

明日の空を壊す

刃

数多の戦が

沸き起こり

ヒトを飲み込み

消えて行つた

何の意味もなく

消えた灯

あの戦の中

一体何が生まれたのだろう

少しも変わらない世界

絶望に向かつて歩く

流れの中で

希望を生み出すのは

武器なんかじゃない

全てを焼きぬくす光

大地を震わす轟音

あの日の前からずっと

あの日の後もずっと

ヒトは罪を犯し続けている

戦は続いている

「ヒロシマ」「ナガサキ」は嘘ではない。

今回のコメントはこれだけにしておきます。

田 中 遼

迷い人

迷い込んだ旅人

地面に伏し 助けを求めている

見て見ぬ振りで 人はその横を行き過ぎる

旅人は知っていた

誰も差し延べる手を持たないと

彼らには その意志すらない

ほんの少し離れた場所に

絶望してる人がいるのに

関係ないと 顔を背ける

僕らは無関係じゃない

この時

この場所で

一緒に生きてるから

どちらかが消えないように

手を貸せるはずなんだ

旅人に手を差し延べた 優しい人

しかしその人は

また一人

傷ついた人を見つけてしまった

いつも

いつでも

助けを求める人が多すぎて

一人では世界は変えられない

僕らはどうして他人に頼つてしまふんだろう

自分でなんとかしなきゃならないはずだ

きっと世界はそうして変わる

一人で全ては救えない

一人で世界は変えられない

それでも

一人ずつが歩きだしたら

一人ずつが変わつたら

それが世界を満たしていくんだ

「一は一でしかない」

「でも、「無限」でさえ、一の積み重ねである」

まあ、誰の言葉だか忘れちまつたわけですが。 f (^__^ ;)

でも、この言葉は覚えています。

傷つけた人

ほんの少しの道のりを

ほんの一瞬振り向くだけで

耳に聞こえる 誰かの痛み

それは確かに

僕が傷つけた人の声

あの日

あの時

あの言葉

あれで

あんなに

泣いたあの人

「貴方の傷を 常に抱えて生きていく」

そんなに強くない僕は

ほんの時たま

そして時々

思い出すだけ

気付かずに

傷つけた人

やむを得ず

傷つけた人

そして

他の誰でもなく

僕のせい

傷ついた人

あの日

あの場所

あの答え

上げて落として

傷を増やした

何を願えども

今更何も出来はしない

今では僕が

「過去」とか「思い出」であれば良い

ただ一度

謝りたいとは思つてゐる

何人も何人も

傷つけた人がいる

何回も何回も

傷つけた人もいる

全て覚えてはいられないけど

忘れられない

人がいる

つい最近、満員電車で見かけた人が、少し「その人」に似ていました。

雰囲気がだいぶ違っていたので別人だとは思いますが……。

妙に鮮明に思い出していました。

独り 真夜中

何が足りないんだろう？

自分でも分からぬよ

それなりに楽しんで

笑つて

毎日を過いでてる

幸せとまでは言えないけど

不幸と言えば大袈裟過ぎる

そんな毎日の中

ふと田が覚めた 真夜中

突然 携帯を手にとる

襲い掛かる孤独

計り知れない恐怖

自分の鼓動が苦しいんだ

何を待ってるんだろう？

自分でも分からないよ

それなりに友情も

愛情も育んで来たし

今更君に未練はない

なかつたことには出来ないけど

前には進めたはずなのに

こんな真夜中

ふと頭の中浮かぶのは

君の姿

もしかしたら今この瞬間

君が……

なんて考えてみるんだ

元気かな?

逢いたいな

逢えるかな?

無理だろな

話したいけど

僕も君も

少し離れ過ぎてしまった

逢いたい時に逢えるような

一人には戻れないんだ

夜が明けるまで

携帯を見つめていた

黒い画面は

朝日を跳ね返して

光りはしたけど

自分で輝こうとは

しなかつた

こんな夜がごく稀にあつたりなかつたり……。

眠れない夜というのは、どうしてあんなに長いんでしょう？

そして、案外眠たくて何もする気になれないという、真可笑しな状況。

で、気付くと寝てるんですから、考えすぎるのが良くないってことなんでしょうかね？笑

二人の時間が終わった時

僕らの目に涙はなかつた

景色を風化させるより

すぐに壊してしまつた方が

きっと楽だから

愛や恋

いいのではもう

そんな分かりやすい言葉は

見つからない

でも友情といつと

何かが違う

他の誰でもなく

一人で打った「ピリオド」

痛みも傷も

軽いものではないけれど

きっと正しい結末なんだろう

少し残つた未練に触り

君は微かに微笑んだ

「しょうがないね」と笑つた顔は

僕の好きだった

その人だった

君も僕も

変わらずにいられると思ってた

砂に刻んだ「I LOVE YOU」も

そこに並んだ足跡も

なにもかも

当たり前だけど

もう消えた

何も残つてないのに

心だけがあの夏に

置き去られている

終わりではない

始まりもしない

ケリをつけ損ねた二人

何がなんだか

分からぬままだけど

今もまだ

途切れた夢の

続きを

探してゐる

他の誰でもなく

二人が望んだ「ピリオド」

正しいことは分かつてた

分かつてたのに

ただ君が大事だった

そんな理由で

僕が迷つて

「コンマ」になつた

別れだけど、相手のことが嫌いになつたわけではない。

そんなシチュエーションです。

「　」が「　」になつた」という部分、無性に気に入っています。

笑

苦しみの生

生きることは

苦しみだと聞いた

それなら何故

人は生まれた

いくら希望をつむいでも

いくら光を探しても

それは踏みにじられていく

毎日のラッシュアワー

絶望を生むのは簡単で

ただ 世界を見ればいい

そんな所に住んでいて

何を手に

何を胸に

生きていけばいいのか

僕には分からぬ

生が苦しみだというのなら

それなら何故

僕らは生きている

いくら頑張っても

歯を食こしづつても

涙が止められなくて

空も滲んで見えない

光はあっても夜の向ひ

これまで『届くはずもない

そんな空の下について

何を見て

何を感じて

生きていいばいいのか

感じるのは

冷たきだけ

生えることが

苦しみだと聞いた

それなら何故

僕らは生まれた

はい、真っ暗です。笑

確かにインドの辺りの宗教で、「生が苦しみである」「そして人や生き物は生まれ変わることによって、生を無限に繰り返す」「それから逃れるために悟らなければならない」というなことを言つて、いたような気がします。

それを聞いたときに最後の一言、

「それなら何故、僕らは生まれた

ところ」と思つました。

まあ、ただそれが言いたいがための作品でござります。笑

同時更新の「生きてはいた。」の十一話で、主人公が似たよつなことを言つていますので、もし興味があればそちらもご覧下さい。

かよなひとまつた想

別れはこつも

雨の降る夜

それは想の決まりなの?

大事なことを 天気にまだね

私のせいじゃない

悪このせあの空ひて

それは上手に逃げてるつもりなの?

雨に濡れ

闇に逃げ込む

愛に飢え

愛を求める癖に

温もりの温度差に震えている

愛の重さが違うなんて

「冗談にもならないだろ

差し出したよ

つかんでくれ

抱きしめたよ

聞こえたかい

鼓動の音確かに

響いてんだろ

強がる君を知つてゐから

この手まだ

離せないよ

さよならを決めた 雨

あがつたならば 空は晴れ

あれは恐らく 君のため

晴れの日に流す涙

それもいいもんだ

そうだらう?

雨に濡れても

笑つていよう

闇の中でも

輝いてこよつ

凍えそうな夜に

抱き合つてこよつ

道の向こうに何があるのか

君と探しに行きたいだけ

良いだろ？

ついて来いよ

君の涙は見飽きたよ

もう一度だけ

試してみるよ

俺はまだ　お前を離れない

先のことは分からぬ

この恋も終わる時が来て

雨が降り出すかもしね

だけど今

空が開け

君を光が包んでる

壊れることを

恐れていたら

何も作れはしないから

もう一度

もう一度だけ

俺はまだ む前を離れない

今日起きた時に、枕元に雨の音が響いてきて、「これを更新するしかないー」と思いました。笑

これはヒルクライムの影響をもろに受けた作品です。

作った時にそっぽっかり聞いてたので。笑

良いのか悪いのか、多分に影響されやすこと」これがあります。

まあ、「パクリ」にならんよつて気をつけます。

誰かが

独裁者にに対して

立ち上がった時

僕に何が出来る?

何をしようとする?

いつでも どこか冷めてる男に

共に戦うことなど

出来やしないけど

せめて 彼らの背中を押したい

いつの時代も

勇気あるものは

世界を変えようとしている

誰だつて

「今」には何かが足りないと

知ってるのに

僕は何もしないまま

諦めている

密告者のせいで

英雄が追い詰められた時

僕はどの立場だらう?

何の役を演じるだらう。

いつでも

一番臆病な男が口を滑らす

まさか僕がそうなのか

いつの時代も

勇敢な者は

後ろから襲われる

誰だつて

生きたいと思うけど

臆病者は

必死で生にしがみつく

いつの時代も

勇敢な者は

世界を変えようとする

いつの時代も

臆病な男は

変わる世界に流されていく

生きていきたいのか、単に死にたくないだけなのか

似ているようで、決定的に違う。

勇者と臆病者の差はそこにある。

ライオンの空

都会の真ん中

灰色の街

アスファルトに囲まれ

区切られた空

高く高く塔を積み上げて

自分の声も届かない

そんな場所を作り上げた

地べたに 立ちすくむ人は

その向こう側をじっと見ていく

ふと浮かんだ 金色の獣

王と呼ばれたライオン

草原に生きる彼は

これが空だと氣付くだろ？

吠えるべき空を求めて

迷うだろうか

夕焼けのアスファルトの街

夕日が世界を燃やしても

どこか冷たい無機質な場所

ここに僕らの居場所など あるのだろうか

温もりを

優しさを

捨てられやしないのに

現実との温度差を

辛く感じじる」ともある

サバンナを生きる 金色の獣

霸者と呼ばれたライオン

彼はその田に 何を映すのだろうか

遙かの地平線は 彼にとつても やはり

届かない高みなのだろうか

王者の声には

似ても似つかぬ

トラックの轟音

低い唸りを上げ

僕の横を掠めていく

久々の更新です。

ちゅうじゅうを離れてこまして、更新できずになりました。

また評価していただいたようすで、ホントにありがたく思っています。

まあわがままを書いつと、それを一番気に入つてもらえたのか教えてもらいたらなあ、と一応正直に書つておこうとします。笑

いや、ホントに題名だけ書くとか、第何話とだけ書いてもらつてでも構いません。

出来ればちゅうじゅうと書いてくれださいな。笑

よろしくお願ひします。

田中 遼

闇いの唄

地に飲み込まれそうな夜

疲れ果て

重い足を引きずつて歩く

こんな日には

悪いことばかり

思い出す

何も手に出来ない

現在を見て

もう一人の僕が

嘲笑つてる

「お前に未来はない」

「そのむなし手がその証」

「お前は持たざる 者なんだ」

彼の言葉を防ぐ

手立てはない

僕が思つた

声だから

でも

生きていかぬきやならない

死ぬにはまだ早過ぎるから

「僕はこの日のために生まれた」

そんな日を　夢見ながら

歩きながら考える

かつて

心に

すぐそばにいた人

でも現在は

そして未来にも

いない人

とっくに諦めてるはずなのに

いまだに過去に囚われてる僕

いつまで引きずりやいいんだ

頭と心が同じなら良いのに

どうしても考えてしまつんだ

でも

歩きださなきやならない

何かを得るために

「僕はこの人のために生まれた」

そんな人を望みながら

死ぬにはまだ早過ぎる

僕はまだ

何もしちゃいない

何も得ちゃいない

「僕はこの時のために生まれた」

「僕はこの人のために生まれた」

そんな日のために

信号待ち

握り締めた拳

ただ前を見つめる瞳

そして意味もないファイティングポーズ

でも 僕は

本気で闘つつもりでいる

信号が変わり

僕は歩き出す

田端さんは

ただ一つの意味

いつたん作り終えた時、「僕」は「その口」を「待ち続ける」だけでした。

そうじやないだらうと思い、結局「意味のないファインディングポーズ」をとつたり、「本氣で闘つ氣」になつたりする、「闘いの唄」になりました。

結構気に入っています。

メッキ

一体いつから決め付けたのか

心を動かす言の葉が

考え

考え

出来上がる

飾り立てた台詞だと

それで言葉をこねて ひねつて いじくつて

メッキみたいな輝きと

おもむやみみたいな煌めきを

作り上げた

自分の細工に酔つてた僕は

ちょつぴつ氣取つて鼻高々に

そのまがいもんをぱらまきだした

「凄いだろ？ この輝きー。」

「本物の黄金ぞー。」

「買つなら今、今しかないぜ？」

「後悔はないよ」

でも今しかし

僕の手元に 積み上がった

在庫の山

分かつてたはず

人はそれほど愚かじやない

自分も騙せぬ代物に

他人ひとを騙せるはずもない

本物があれば

それだけで良いのに

また小細工を繰り返す

僕がいる

「なあ誰か」

「誰か買つてくれよ」

「IJの輝きが見えないのか?」

「IJの価値が分からぬのか?」

壁の落書きに

真実の輝き

僕のメツキは

たちまち崩れて力をなくす

残骸と成り果てたそれは

見るも無惨な姿をさらけ出した

そして僕は初めて

自分の愚かさを知る

「ヨーヨークの壁の落書きに、こんなものがあるやうです。

「心はパラシュートと同じで、開かない限り役には立たない」

正直、自分の「メッキ」では、とても敵う氣がしません。

君が僕を去ったのは

ひどくもつともな理由わけだった

君が僕を愛してないから
僕が君を愛してないから

嫌いになつた訳じやなく

ただ終わつたんだ

涙だつて儀式みたいなもんを

悲しむ時間は終わつたはず

あの星に導かれ

君が始めた新たな旅路

僕は「^{ナリ}目的地」にはなれない

同じ場所を目指すことも

二人がもう

並んで歩くことはない

君が僕を去った後

ひどく虚ろな場所が出来た

一人で過ごした部屋の中

そこに残った僕の中

悲しくはない

痛みもない

ただからっぽなだけ

時が過ぎ

君を導くあの星が

何処かに消えてしまうかもしれない

それでも君が

迷わぬよう

僕は変わらずにいよう

いつでも空にある

ただ一つの北極星

人は変わっていくもの

星も燃え尽きる時がくる

恋にだつて終わりが付き物

でも僕は

変わらずにいたい

何が出来るでもないけど

ただ君が迷わぬように

北の空で

輝いていよう

未練だかなんだか

知つたことじやないけど

今はただ

君の航海の

無事を祈る

「今はただ君の航海の無事を祈る」と「僕は変わらずにいたい」

これが書きたかったんだと思います。

前者をするイメージで、「不变」なもの……

「北極星」！

という感じかな……？ つる覚えです。笑

一人ぼっちの「H 10ve you」

高い高い

空の下で

公園のベンチに 座つてた

一人ぼっちで座つてた

碧く澄んだ

空の下で

小さい子どもが

はしゃいでる

体中で 笑つてら

大きな声が聞こえてくるけど

余計に独りになつた

僕に話し掛ける

君がいないから

I love you

君はもういないけど

言葉だけが響くけど

言わせてほしい

誰よりも

そう誰よりも

顔を上げると

夜の闇

満月が僕を見下ろして

僕の中を 照らした

月の光が

静かな夜が

冷たい風が

孤独な僕を

締め付ける

I l o v e y o u

君に届くことはないけれど

もう遅いと知ってるけれど

忘れられる程

器用じゃないから

この夜空に恋へよ

誰も聞いていない

僕の気持ちを

君への想いを

君に向けて弦くよ

独り言みたいに 弦くよ

I love you

人生で初めて作った「ラブソング」で、「ほほ」作った当時ままです。

この頃、僕は「尾崎豊」も「Mr. Children」も「Queen」も「BUMP OF CHICKEN」も知らず、「The Beatles」も「ゆず」も「多少聞いたことがある」程度でした。

ここまで書いて、自分が何を書いたかたったのか忘れちまいましたが、

ともかく、好きな詩です。

いつもいつでも

側にいたのは俺だった

君と誰かの終わり

エピローグとプロローグの間で

君をなぐさめる 第三者

また 君が泣いている

相手の消えた舞台の上で

王子様に置いていかれた

お姫様

「ハッピーHンデ」なんて

ありきたりだつて言つたが

君の演じる 悲劇だつて

もつこい加減 飽きてきただろ

こつまで俺は ここにいるんだ

このままじや俺まで巻き込まれちまつ

今まで俺が

近づけば離れた癖に

何故今

身を寄せてくるんだ

君を愛したくはない

止まれなくなる

なあ お姫様

俺にそこへ

その悲劇の舞台に

上つてこ ciòとひづのか

まだ足りないのか

どれだけ泣けば気が済むんだ

何故か 悲劇を望む お姫様

そんなつまつはないって言つたが

きっとそつなる

君はいつも いつだって

そういう道を選んできたのだから

君を愛したくない

その気がなくたって

俺は全てを奪われてしまつ

だから

だからなんだ

君を愛したくない

俺は悲劇なんて見たくない

君を愛したくない

結末はもう決まってるんだ^{ラスト}vi

結局

俺に選べる道はなく

俺は舞台の上に立つ

君を愛したくない

そんなことを言いながら

舞台の上のお姫様は

それを聞いて微笑んだ

「もう手遅れよ

「あなたも

「私も」

もともと「I Don't Wanna Love You」というタイトルでした。

本文の「愛したくない」という部分で、それは「Hoobasta nk」というアーティストの「I Don't Think I Love You」という曲の歌詞を見て、何となく浮かんだフレ

一ズだつたんですが……（ちなみにその歌詞の内容はほとんど覚えてません笑）。

「I Don't Wanna Love You」、口に出して
もううつと分かると思つんですが、リズムが非常に気持ち悪い（^_^）

まあちょいちょい手直ししたら「悲劇」という単語が多くなったんで、それをタイトルに決めました。

そして「悲劇」より「Tragedies」のほうがしっくりきたので、ここに行き着いた、といつわけです。

……蛇足でした。

久々の更新でちょっと張り切っています。笑

流れ星

一人夜空を見上げ

星を探した

真夜中の駐車場

都会じゃたいしたものは見えないけど

それでも光はそこにある

ふと思つて

「星に願いを」

口笛で吹いて

夜空が滲んで

無性に帰りたくなつて

戻れない場所に

戻る道を探してるんだ

願いをたくした 流れ星

一瞬の輝きを

一晩中探した

叶わない夢でも

上を見上げれば

涙もこぼさずにするんだろ

いつか共に見た空

あの時

星は見えなかつた

流れた星に

「もう一度」と願つても

いつでも

星が燃え尽きる方が

ずっと早いもの

見えるものと見えないもの

知らないものと知っているもの

どちらも僕の周りに落ちていく

些細なものが

一瞬の光を放ち

人の心をつかむ

塵が流れ星になれるなら

僕もいつかは輝けるはず

願いをたくした流れ星

一瞬の輝きを

一晩中探した

またまたノートにいつの間にか書かれていた詩の掲載です。

「あんまり考えてないのがよく分かる」と言つが、「実によく分からぬ」と言つが……。 f (^__^ ;)

まあいちいち改変したりするのも面倒なので、そのまま載せさせてもらいます。笑

君といた夢

また君の夢を見た

夜明けと日覚めの狭間で

起きてからもじばりくは

僕は夢の中にいた

誰かが言つてた

「夢に出てくるのは　君に会いたがつてゐる人なんだ」と

それがホントだったら　良いのに

そして

ホントだとしたら

ねえ僕は もしかして

君の夢ゆめにお邪魔よやましてるのであるのかなあ?

だとしたら ごめんな

君を困らせてるんだもんな

田をつむつとくれって言つても

君も眠つてゐんだっけ

だからせめて

その眠りが安らかであつますよ」

「諦めた」と

口に呟したその言ひ

君の夢を見る不思議

自分が一番

自分の嘘を知つてゐる

ホントは正直でりたいんだけどなあ

ねえ僕は もしかして

ずっとこのままなのかなあ？

夢に見るだけで

満足した振りをして

自分を騙して

笑ってみせて

自分で暴いて

悲しくなつて

分かり切つた真実

夢は夢でしかないって

だけのこと

ねえ僕は いつまで

この朝を覚えていられるかなあ？

この幸せな時を

光に満ちたこの瞬間ときを

そして同時に

悲しくて

切ない

そんな時を

忘れないのに

望まない現実が

僕を飲み込んでいく

ねえ僕は いつかまた君に会えるかなあ？

「会えると見てのになあ」

夢から覚めた僕は

ただ

そう呟いた

一気に作りました。

そして、即公開です。笑

「夢」系の作品が多くなってきたような気が……。

そろそろネタ切れですかね？笑

バリア

君と僕

二人の間に

薄く見えない

そして確かに

強固な

壁がある

超えられず

壊せもせず

僕はピエロのように

見えない壁に張り付いた

たつた一人の

観客は

笑いの代わりに

涙一つ

その場で落つことした

「ゴメン

この壁は壊せない

今まで

「サヨナラ」のない

恋はなかった

また傷つすべからいな

死んだ方がまし

知ってるさ

僕がここ

壁の向こうにいる間

君が選んだ「サヨナラ」が

何度も君を

傷つけたこと

涙を流し

傷を濡らして

君はバリアを

強くしていく

でも一度だけ

僕を試して欲しいんだ

君の望んだ「永遠」を

神に誓える訳じゃない

「絶対」の恋なんて

しんどいだけだろ

ただ

ここにあるのは「真実」で

君に触れたいだけ

僕はただ

「特別」になれるかは

分からぬいけど

涙さえぬぐえない

この僕に

君を抱きしめる

資格はなくて

今もまだ

パントマイムを続けてる

僕には

かすり傷さえ

つけられなかつた

君のバリア

その壁の向こうから

君が手を

重ねてくる

今

僕は初めて

君のぬくもりに

たどり着いた

いやあ、今年は頑張った。笑

人から見れば「停滞」とか「後退」ともいえる年でしたが、自分の中では確実な「進歩」と「確信」を獲られたと思っています。

多分。笑

では来たる2011年も、この「楽譜のない歌たち」をよろしくお願ひします！

田中 遼

なんだか最近

つまんなくて

よく昔のことを思い出すんだ

難しいことなんか

何にも知らなくて

ただ楽しかった日々

もう戻らない日々

人生に巻き戻しボタンがあれば

すぐにそこに帰れるのに

でもそんなものがある訳はなく

僕らの日々は流れていく

何故だか最近

苦しくて

「今」が終われば良いと思つんだ

きっと未来には

きっと良いことが起るはず

そう信じて

今日もなんとか生きてるけど

人生に早送りボタンがあれば

すぐにそこへ辿り着けるのに

でもそんなものがあるはずがなく

僕らの日々はゆっくり進む

ホントは

一つだけ

僕らはボタンを持っている

苦しみや退屈から

脱出可能な

一つのボタン

でも僕は

それを

押さない

パソコンから発掘した詩です。

てつきりとうに掲載したと思っていたんですが、見たところ未掲載のよう少し驚いています。

ホントに既出じゃないですかねえ？笑

向のために生きている

右も左も

人の山

誰もが疲れ切った顔で

吊り革を握ってる

月曜日の朝

安らぎとは言えない

一応の休息を背に

俺達はまた

暗い

重い

この世界で運命を呑んだ

行き詰まつ

止まってしまった俺達は

横のあんたに

いやむしろ

自分自身に

問い合わせなきやならぬ

何のために生きてこらるのか

答へられないのはさうしてだ

生れるひとは

意味などないひとがくなら

死んじまつても

同じだらづが

右も左も

うかがつて

はみ出さずここにいることを

ひたすら田指す

こんな世界に誰がした

人は誰でも

自分自身であるべきなのに

それが出来ない

不幸な世界

俺達はただ

幸せであつたいだけだから

横のあんたに

いやむじい

自分自身に

聞こ掛けなきやなじない

何のために生きてこらののか

幸せなんて

普通に生きてるだけで

手に入るものじゃないのか

いつからこんな

得難いものになつたのか

死にたい訳じやないけれど
妥協して生きるよう

貫いて死ぬ方が良いから

馬鹿と思える道を

選ぶ時もある

何のために生きているのか

答えられないのはどうしてだ

死んだ方がマシだと歎く前に

あなたはホントに生きているのか

何のために生きているのか

答えられないのはどうしてだ

偉そうに言ひ俺は

多分

一人で

空しく

死んでいくだけ

それでも

ここで

「の人が」みの中で

もう一度

問い合わせる

何のために生きているのか

答えないのはどうしてだ

死んでも良いと本氣で思つ」とあります。

愚痴を「ほし」、不平を「ほり」だけの人生なら「ほ」です。

でも、「生きるため」というより、「生き延びるため」に、その道を押し付けられることもあります。

そんなことに意味があるのでしょうか。

僕には分かりません。

ただ一つ、(かなりカッコつけ) 言える事があります。

「手元のワンペアにこだわる奴には、ロイヤル・ストレート・フラッショは絶対に作れない」。

句のために生きてる（後書き）

P・S・

B・Zの「Motel」にこんな歌詞がありました。

「ひとりじゃないから 汚れながら生きてる」

多分、そういうことなんでしょうね。

ずっと ずっと

「……久しぶり。元気だった?」

何年も会ってなかつた

その姿

会わない間

僕は君の影に恋した

そこにいた君に

ずっとと思い描いていた

愛しい君

だけど今

その全てが崩れれる

思っていたより

ずっと ずっと

素敵なか

僕にとっての

「パーフェクト」

僕は君に恋してる

この胸が

ありえないほど

高鳴つて

抱きしめたくて

僕は君を見つめてるんだ

この腕が

君を求めてる

もひとつ可憐へ変わった

變じい君

そう今 僕は

全てを捨てられる

想像したより

ずっと ずっと

簡単だった

僕は君の手を取った

「僕は君を愛してる」

思っていたより

ずっと ずっと

素敵なもの

僕にとっての

「パーフェクト」

僕は君に恋してる

想像したより

ずっと ずっと

簡単だった

僕は君を抱きしめる

君は

僕の手の中で

笑つて

泣いた

かなり前から、「これを100個目にして、「楽譜のない歌たち」を完結させよう」と考えていました。

作ったのが（PCに残っている記録では）2009年ですから、隨

分と暖めてきたもんです。笑

これは、授業で読んだ村上春樹の短編「四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会つ」とついて「という小説のことを考えてひらめいた詩だつたよつに記憶しています（確か）。

まあそれはともかく、これで「楽譜のない歌たち」完結です。

全体的な後書きは次話に載せます。

では。

最初に言わせて貰います。

「ネタ切れ」ではありますん！笑

でも、とりあえず「楽譜のない歌たち」はここまでです。

「楽譜のない歌たち」。

うん、実にいいタイトルだ！笑

かなり気に入つていて、出来ればずっとこれで通していきたいな、とも思つたこともあります。

しかし、60話あたりから「こんなに長くしても、なかなか見る気にならないだらけ」という風に感じながら更新していました。

まあ、モチベーションがあんまり上がつてこなかつたといつか……。

それでも、「ずっとずっと」に書いたように、「100話」を先に決めていたので、そこまでは頑張るつもりでした。

ただ今日、ふと思つました。

「そんなことに意味はないだろ」。

今まで散々「テキトー」にやつておこい、最後だけちつちつ締めようとは、実に馬鹿馬鹿しい。笑

「いつこう公開方法 자체が「皿几満足」でしかありませんが、そんな変なこだわりは、その極みと言つて良いでしょ。」

そんなわけで、氣も進まなくなつてきました! とだし、わざわざやめちまつ! とこつました! 笑

「楽譜のない歌たち」に匹敵するような良いタイトルが思いついたら、すぐにまた詩の投稿を再開したいと思つてます。

ですので、また見かけたらぜひ立ち寄つてくださいませ。

では、ここまで読んでもらいたが、あつがといひやれこましたー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9711e/>

楽譜のない歌たち

2011年2月2日12時22分発行